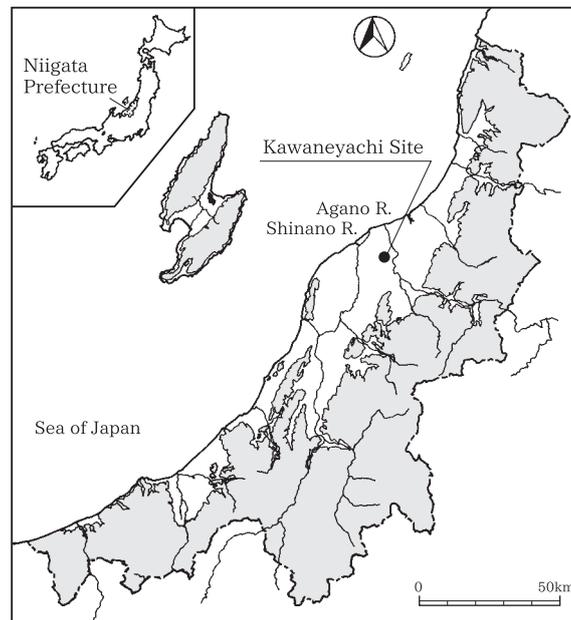


川根谷内遺跡 第6次調査

— 主要地方道新潟中央環状線道路整備事業に伴う第2次発掘調査報告書 —



2019

新潟市教育委員会

例 言

- 1 本書は新潟県新潟市江南区曙町5丁目地内に所在する川根谷内遺跡（新潟市遺跡番号365）の発掘調査記録である。川根谷内遺跡第6次調査は平成30年度に実施した。
- 2 調査は新潟中央環状線道路整備事業に伴い、新潟市土木部東部地域土木事務所建設課から新潟市が受託した。調査は新潟市教育委員会（以下、市教委という）が調査主体となり、新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター（以下、市文化財センターという）が補助執行した。
- 3 平成30年度に発掘調査と整理作業・報告書刊行を行った。発掘調査と整理作業の体制は第三章に記した。
- 4 発掘調査、整理作業の支援業務は株式会社吉田建設に、調査に伴う測量業務は株式会社イビソクに委託した。
- 5 出土遺物及び調査・整理作業に係る記録類は、一括して市文化財センターが保管・管理している。
- 6 本書の作成・執筆・編集は牧野耕作（市文化財センター）と脇本博康（株式会社吉田建設）が行った。
- 7 執筆は第I章を牧野、第IV・V章を脇本、第II・III・VII章を牧野・脇本が行った、第VI章は株式会社パレオ・ラボに委託した。
- 8 本書で用いた写真は、遺跡写真は牧野・脇本が、遺物写真は脇本が撮影した。ただし、写真図版1は米軍（国土地理院発行）、写真図版2下・3・4上の空中写真は株式会社イビソクに委託して撮影したものを使用した。
- 9 遺構図面等の各種図版作成・編集は、有限会社不二出版に委託してデジタルトレースとDTPソフトを使用して実施し、完成データを印刷業者に入稿して印刷した。
- 10 本書で報告する川根谷内遺跡の調査成果の一部については、現地説明会や『平成30年度新潟市遺跡発掘調査速報会』で公表されているが、本書と齟齬がある場合は、本書の記載内容を持って正とする。
- 11 調査から本書の作成に至るまで下記の方々・機関よりご指導・ご協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。

（所属・敬称略、五十音順）

亀田郷土地改良区・（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団・酒井和男・新潟県教育庁文化行政課・藤田建設株式会社

凡 例

- 1 本書は本文・別表と巻末図版（図面図版・写真図版）からなる。
- 2 本書で示す方位は全て真北である。磁北は真北から西偏約9度である。掲載図面のうち、既存の地形図等を使用したものは、原図の作成者・作成年を示した。
- 3 引用文献は著者と発行年（西暦）を〔 〕中に示し、巻末に一括して掲載した。
- 4 遺構番号は発掘調査現場で付したものをを用いた。番号は遺構の種別ごとに付さず、通し番号とした。
- 5 土層の土色及び遺物の色調観察は『新版 標準土色帖』（小山・竹原 1967）を用いた。
- 6 土器実測図の断面は、須恵器を黒塗り、それ以外を白抜きとした。
- 7 土器実測図では全周の1/12以下のような遺存率の低いものについては、誤差があるため中軸線の両側に空白を設けた。
- 8 遺物の注記は川根谷内遺跡の「川根谷内」とし、出土地点や層位を続けて記した。「川根谷内」の前には「18」を付し2018年を表した。
- 9 遺物番号は土器・金属製品を通し番号とし、本文及び観察表・写真図版の番号は同一番号とした。
- 10 遺構計測表中における（ ）付きの値は現存値を、遺物観察表中における（ ）付きの値は推定値を意味する。
- 11 遺構平面図での切り合い関係のある遺構の上端・下端の表現について、切られている遺構の場合、上端の復元が可能ならば破線、下端は切っている遺構より深度が深ければ実線、浅くても復元が可能であれば破線で示した。

目 次

第I章 序 章	1
第1節 遺跡概観	1
第2節 発掘調査に至る経緯	1
第II章 遺跡の位置と環境	3
第1節 遺跡の位置と地理的環境	3
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境	3
第III章 調査の概要	8
第1節 試掘・確認調査	8
第2節 本発掘調査	11
A 調査方法	11
1) 調査前の状況	11
2) グリッドの設定	11
3) 調査方法	11
B 調査経過	11
C 調査体制	12
第3節 整理作業	12
A 整理方法	12
1) 遺 物	12
2) 遺 構	12
B 整理経過	13
第IV章 遺 跡	14
第1節 概 要	14
第2節 層 序	14
第3節 遺構各節	14
第V章 遺 物	16
第1節 概 要	16
第2節 試掘調査出土遺物	16
第3節 本発掘調査出土遺物	16
第VI章 自然科学分析	18
第1節 花粉分析とプラント・オパール分析	18
第VII章 総 括	24
第1節 川根谷内遺跡の性格	24

引用・参考文献	25
別表	27
報告書抄録・奥付	巻末

挿図目次

第 1 図 川根谷内遺跡周辺の地形分類図	4	第 7 図 自然科学分析試料採取地点	18
第 2 図 川根谷内遺跡周辺の遺跡分布図	5	第 8 図 分析試料採取層準	18
第 3 図 横越島地図	6	第 9 図 川根谷内遺跡における花粉分布図	19
第 4 図 新潟中央環状線（川根谷内遺跡）試掘・ 確認調査経緯図	8	第 10 図 産出した花粉化石	20
第 5 図 川根谷内遺跡周辺試掘・確認調査位置図	9	第 11 図 川根谷内遺跡における植物珪酸体分布図	22
第 6 図 川根谷内遺跡周辺試掘・確認調査土層柱状図	10	第 12 図 基本層序 CC'-2 から産出した植物珪酸体	22

表目次

第 1 表 川根谷内遺跡調査履歴	1	第 4 表 分析試料一覧	18
第 2 表 川根谷内遺跡周辺の遺跡	5	第 5 表 産出花粉孢子一覧表	20
第 3 表 横越島水害年表	7	第 6 表 試料 1g 当りのプラント・オパール個数	22

別表目次

別表 1 遺構計測表	27	別表 3 金属製品観察表	27
別表 2 土器観察表	27		

図版目次

図版 1 川根谷内遺跡周辺の旧地形図 (1/50,000)	図版 9 遺構部分図 2 (1/100)
図版 2 川根谷内遺跡周辺の旧土地利用図 (1/12,500)	図版 10 遺構部分図 3 (1/100)
図版 3 川根谷内遺跡と周辺の遺跡 (1/20,000)	図版 11 遺構部分図 4 (1/100)
図版 4 グリッド設定図 (1/4,000)	図版 12 基本層序 1 (1/40)
図版 5 遺構全体図 (1/250)	図版 13 基本層序 2 (1/40)・遺構実測図 1 (1/60)
図版 6 出土遺物重量分布図 1 (1/250)	図版 14 遺構実測図 2 (1/100)
図版 7 出土遺物重量分布図 2 (1/250)	図版 15 出土遺物
図版 8 遺構部分図 1 (1/100)	

写真図版目次

写真図版 1 川根谷内遺跡周辺空中写真	基本層序 CC' 北側	基本層序 DD'
写真図版 2 調査前現況 完掘状況全景	基本層序 EE'	基本層序 FF'
写真図版 3 完掘状況全景	写真図版 7 SX1 土層断面	SX1 完掘状況
写真図版 4 完掘状況全景	畦畔 5 土層断面	畦畔 6 土層断面
写真図版 5 調査区全景	畦畔 7 土層断面	畦畔 8 土層断面
写真図版 6 調査前現況 基本層序 AA' 基本層序 BB' 基本層序 CC' 南側	畦畔 5 完掘状況	畦畔 7 完掘状況
	写真図版 8 出土遺物	

第 I 章 序 章

第 1 節 遺 跡 概 観 (第 1 表)

川根谷内遺跡は新潟市江南区曙町 5 丁目地内 (旧亀田町・横越町) ほかに所在する。遺跡は、阿賀野川の支流にあたると考えられる旧河道の南側の自然堤防上に立地し、時代は奈良・平安時代である。現地表面の標高は約 3.1 ～ 3.7m で、現況は遺跡範囲の大部分が宅地化されている。阿賀野川まで東に約 1.9km、小阿賀野川まで南に 2.5km の距離にあり、自然堤防に沿っておよそ、北西から南東方向 340m、北東から南西方向 100m の範囲で広がっている。昭和 48 年作成の埋蔵文化財包蔵地調査カードによると、昭和 48 (1973) 年に実施した分布調査により発見、周知化された。昭和 40 年代前半に土取りされ、遺跡の大部分が消滅したとされている。埋蔵文化財の発掘調査は、今回の本発掘調査を含め、試掘調査 1 回、確認調査 4 回、本発掘調査 1 回の計 6 回の調査が行われている (第 1 表)。

第 1 表 川根谷内遺跡調査履歴

通算発掘調査回数	新潟中央環状線道路整備事業に伴う発掘調査回数	調査年次	主な成果	調査種別	調査原因	担当	調査面積 () は対象面積	トレンチ No.	文献	新潟市調査番号
		1973 (S48)	分布調査により周知の遺跡として登録	分布調査		酒井和男				
1次		1981 (S56) 3.11		確認調査	地域開発	酒井和男	6㎡			1980111
2次		2008 (H20) 4.4	遺構・遺物なし	確認調査	個人住宅建設	新潟市埋蔵文化財センター 今井さやか	4.8㎡ (291.86㎡)	1・2T		2008103
3次		2015 (H27) 8.20・21	近現代以降の土坑1基、奈良・平安時代の土師器細片1点	確認調査	保育所建設	新潟市文化スポーツ部 歴史文化課 朝岡政康	56.13㎡ (2397.73㎡)	1～4T		2015150
4次		2017 (H29) 6.2	時期不明の溝状遺構1条、遺物なし。	確認調査	事務所建設	新潟市文化スポーツ部 歴史文化課 潮田憲幸	3.41㎡ (281.29㎡)	1T		2017130
5次	1次	2017 (H29) 9.19～22	溝1条、畦状構造、不明な落ち込み、土師器・須恵器 (古墳・平安時代)	試掘調査	道路改良 (新設)	新潟市文化スポーツ部 歴史文化課 潮田憲幸	217㎡ (6,700㎡)	1～14T		2017191
6次	2次	2018 (H30) 8.1～10.15		本発掘調査	道路改良 (新設)	新潟市文化スポーツ部 歴史文化課文化財センター 牧野耕作	821.57㎡		[本書]	2018004

第 2 節 発掘調査に至る経緯

新潟市では、平成 17 年度より、広域合併した市内を環状に繋ぐ横断道路を整備する目的で、主要地方道新潟大外環状線建設事業 (平成 24 年 9 月 11 日より主要地方道新潟中央環状線道路整備事業と名称を変更) が進められている。この環状道路建設に伴い、道路法線の用地買収進捗にあわせて、市内各所で、順次、埋蔵文化財の試掘・確認調査が行われている。川根谷内遺跡付近では、大阿賀橋が架かる阿賀野川左岸の小杉・横越地内で試掘・確認調査が行われてきた (第三章)。

上記事業の進展に伴い、平成 29 年 8 月 29 日付新東土木建第 196 号で、環状線建設事業を所管する新潟市土木部東部地域土木事務所 (以下、東部土木) より、新潟市文化スポーツ部歴史文化課 (以下、歴史文化課) へ、曙町 5 丁目地内を対象として、埋蔵文化財の事前調査 (試掘・確認調査) の依頼が提出された。歴史文化課では、これをうけ、文化財保護法 (昭和 25 年法第 214 号) 第 99 条の規定により、新潟県教育委員会教育長 (以下、県教育長) へ、平成 29 年 9 月 15 日付新歴 B 第 152 号の 2 で埋蔵文化財の発掘調査着手の報告を行った (着手報告)。平成 29

年 9 月 19 日から 22 日にかけて試掘調査を実施し、平成 29 年 9 月 22 日新歴 B 第 152 号の 3 で埋蔵文化財の発掘調査終了の報告を行った（終了報告）。

調査の結果、14 カ所の試掘坑のうち、6 カ所で平安時代の須恵器・土師器が出土し、2 カ所で溝 1 条、畦状構造、不明な落ち込みが検出された。この結果から、川根谷内遺跡の範囲が北西へ広がることが確認された。工事用地が遺跡範囲内であるため、東部土木より平成 29 年 12 月 13 日付新東土木建第 366 号で法第 94 条の規定による埋蔵文化財発掘の通知が提出された。歴史文化課ではこれを受け、平成 29 年 12 月 18 日付新歴 B 第 238 号の 3 で県教育長へ、遺構・遺物が出土し道路工事による影響を受ける部分については本発掘調査の必要がある旨の副申を添え、県教育長へ進達した。これを受け、県教育長より東部土木に対し、平成 29 年 12 月 28 日付教文第 1177 号で「工事着手前に発掘調査を実施する」旨の法第 94 条指示文が通知された。そして、歴史文化課と東部土木の協議により、本発掘調査範囲を決定し、平成 30 年 7 月 30 日付新歴 F 第 3 号で法第 99 条の規定による埋蔵文化財の発掘調査着手の報告を行い（着手報告）、本発掘調査を実施した。平成 30 年 8 月 1 日から平成 30 年 10 月 15 日まで本発掘調査を実施した。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境 (第1・2図、図版1・2)

新潟市は越後平野のほぼ中央に位置する。越後平野は南西側の角田・弥彦山塊、北を朝日・飯豊・越後山地、南を東山丘陵・新津丘陵・笹神丘陵・五頭連峰に囲まれ、阿賀野川と信濃川の2大河川によって形成された広大な沖積平野である。越後平野の西側には、村上から角田山麓まで海岸線に平行して南北約70kmの新潟砂丘がある。新潟砂丘は、内陸側から新砂丘Ⅰ-1・Ⅰ-2・Ⅰ-3・Ⅰ-4(約7,600～4,800年前)、新砂丘Ⅱ-1・Ⅱ-2・Ⅱ-3・Ⅱ-4(約4,600～1,400年前)、新砂丘Ⅲ-1・Ⅲ-2(約1,800～900年前以降)の10列に細分される(鴨井ほか2015)。最も内陸まで砂丘が発達しているのは亀田付近で、海岸からの距離は10kmを測る。これらの砂丘によって越後平野の河川は流路が規定され、また内陸部からの排水が困難となり近代まで湛水域が広がる洪水常習地域であった。近世以降、治水のため砂丘を縦貫する放水路が幾度となく計画・実行されたが、大河津分水の完成(1922年)や粟ノ木川排水路の新設(1948年)により乾田化が成功した。

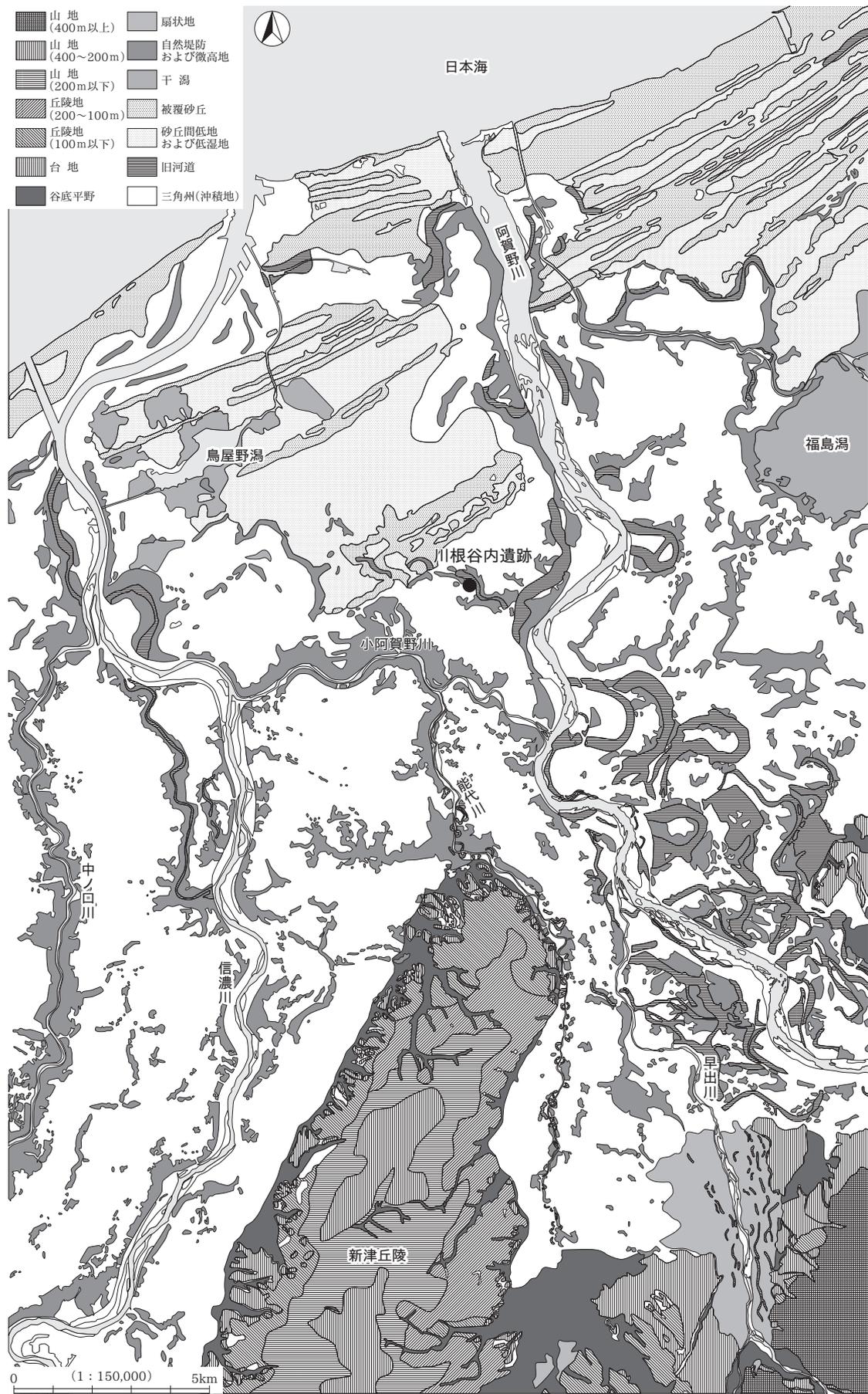
今回調査を行った川根谷内遺跡は、越後平野のほぼ中央に位置し、西を信濃川、東を阿賀野川、南を小阿賀野川に囲まれたかつて横越島と呼ばれた場所にある。前述のとおり湛水域であり、低湿地では水田、微高地に集落・畑といった土地利用であった。横越島も水害常習地域であり、最も被害が甚大であった大正2(1913)年の木津切れでは、川根谷内地区にも濁流が押し寄せ一週間も水が引かなかったという(和田2003)。

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境 (第1・2図、図版1・2)

縄文時代の遺跡 亀田砂丘(新砂丘Ⅰ-2～4)周辺では、縄文時代前期初頭から人類の活動の痕跡が認められる。いずれも新砂丘Ⅰ-2上に立地する遺跡であり、最も古い遺物は砂崩遺跡(58)から出土した前期初頭の布目式土器である(新潟市2007)。また、前期前葉から晩期後葉にかけて断続的に営まれた集落遺跡である笹山前遺跡(69)では、東北地方の表館式土器の深鉢が出土し、広く交流を行っていたことが推察される(廣野1997)。前郷遺跡(60)では縄文晩期前葉から中葉にかけての浅鉢・深鉢、石鏃・磨製石斧などが表面採集されており、縄文時代全般を通して亀田砂丘に人々が生活していたことを裏付けている(酒井2000)。

弥生時代の遺跡 弥生時代においては、前期～中期の遺跡である西郷遺跡(7)で縄文的要素の残る足形土版のほか、北陸系の小松式土器とともに管玉や管玉の未成品、工具類が出土した。このほか水田跡は見つからなかったものの前期～中期前葉の炭化米が出土した(土橋ほか2009)。また、西郷遺跡は地表下3mが遺構確認面であった。砂丘に営まれた遺跡が地盤沈下によって埋没したものと考えられる。このような沖積地下に埋没している砂丘上の遺跡が近年相次いで発見されている。中期の遺跡は、このほかにも竪穴建物1棟・北陸系の小松式土器・信州系の栗林Ⅰ式土器・東北南部系の山草荷式土器や玉作関連遺物が出土した駒込小丸山遺跡(63)(家田1987)や小松式の壺や甕のほか玉作りの際に使用する工具である擦切具が表採されている山ノ家遺跡(61)、前郷遺跡(60)などがあり、いずれも新砂丘Ⅰ-2上に近接して位置し、玉作集落として機能していた可能性が指摘されている(酒井2003)。

古墳時代の遺跡 古墳時代は、砂丘以外にも自然堤防上に集落が展開する遺跡が現れるようになる。前期では新砂丘Ⅰ-4の沿岸砂洲上の微高地に営まれた東園遺跡(46)がある(朝岡・諫山2003)。この遺跡では総量約4キログラムに及ぶ炭化米が出土した。自然堤防上の遺跡では土師器の高杯や甕が出土した上郷A遺跡(97)が



新潟県『土地分類基本調査 新潟・新津』1972・1974より作成 (1/150,000)

第1図 川根谷内遺跡周辺の地形分類図



(原図：国土地理院 1：25,000「新津」「水原」「新潟南部」「白根」平成27年、遺跡は新潟県遺跡台帳（2017年3月現在）による。

第2図 川根谷内遺跡周辺の遺跡分布図

第2表 川根谷内遺跡周辺の遺跡

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	鶴ノ子	平	27	齊助山	縄・弥・古代	53	浦ノ山	平	79	山のハサバ	奈・平
2	下西	古墳	28	亀田城山 A	縄・弥・古代	54	三條岡	古代	80	居附 A	平～室
3	亀田四ツ興野居付	平	29	茨島	古代	55	砂崩上ノ山	古代	81	新田郷	平
4	泥瀧	奈・平・鎌	30	所島前	縄・古代～近世	56	砂崩前郷	縄・平・江	82	宮尻郷	古代
5	早通前	奈・平・鎌	31	亀田六枚田	古墳～奈・平	57	砂崩早稲田	縄・古・近	83	下郷	平
6	西前郷	縄・古代	32	岡田	奈・平	58	砂崩	縄・古代	84	下郷経塚	安
7	西郷	縄～弥・古代	33	牛道	平	59	迎山	縄・奈～室	85	筑木	奈・平・近世
8	大蔵	古代	34	砂岡	奈・平	60	前郷	縄・弥・古代	86	上沼	古代
9	市助裏	平・鎌	35	袋津向山	縄	61	山ノ家	弥・古代	87	川根谷内	古代
10	川西	平・鎌	36	塚ノ山	奈・平	62	駒込墓所	古代	88	下郷西	中世
11	狐山	古代	37	前山	古代	63	駒込小丸山	縄・弥・古代	89	新田郷南	古墳・平
12	亀田道下	古代・近世	38	金塚山	縄・古代	64	駒込居浦郷	古代	90	曾我墓所	平
13	手代山北	平・中世	39	彦七山	古代	65	上の山	弥・平	91	下郷南	平・鎌～室・近世
14	手代山	古墳・古代・鎌	40	北山	平	66	藤山	平・鎌	92	上郷D	平・中
15	貝塚	古代	41	大道外	奈・平	67	平山	平	93	横越館跡	室
16	中の山	古代	42	清水が丘	平	68	神明社裏	平	94	上郷北	平
17	日水	古代	43	丸山	平	69	籾山前	縄・弥・古墳・古代	95	川根谷内墓所	平・室・近世
18	荒木前	縄・平・中世	44	荻荷谷墓地	平	70	細山石仏	室	96	上郷 C	室
19	三王山	平・中世	45	荻荷谷	古代	71	中山	縄・古墳・古代	97	上郷 A	古墳・奈・平
20	養海山	縄・弥・古墳・平	46	東團	縄・弥・古墳	72	城山	縄・古墳・平・鎌	98	上郷 B	奈・平
21	武左衛門裏	縄・弥・古墳・古代	47	直り山 B	平	73	居附 B	不明	99	円通寺石仏	室
22	八幡前	弥・平	48	小丸山	縄・古墳・平・中世・近世	74	居附 C	不明	100	天王杉	平
23	日水前	縄・弥・平	49	直り山 A	平	75	松嶺寺	平	101	結七島	古墳・古代
24	日水南	縄・弥・古墳・古代・室	50	小丸山東	平	76	中谷内	古墳	102	中谷内	古墳・奈・平・中世
25	城所道下	平	51	松山	縄・中世	77	江尻	平	103	新久免の塚	室～江
26	亀田城山 B	南・室・江	52	松山向山	平	78	小杉上田	縄・古代	104	居屋敷跡	古墳・平・鎌～室・近世

ある〔上野・春日 1997〕。また笹山前遺跡（69）では、中期から後期の竪穴建物や掘立柱建物が検出され、勾玉や滑石製の白玉が出土したことから拠点的な性格を持つ集落と考えられている〔廣野 1997〕。

古代（奈良・平安時代）の遺跡 古代は土木技術が発達し低湿地への進出が確認され、9世紀中頃から遺跡数が自然堤防上と砂丘上で爆発的に増加する。砂丘上の遺跡では大形の掘立柱建物・柵列等が検出されたほか、「西家」と書かれた墨書土器、緑釉陶器素地の椀などが出土した小丸山遺跡（48）がある〔小池・本間 1995〕。一方、自然堤防上では、旧河川沿いに倉庫と考えられる掘立柱建物や四面庇付の建物が検出され、木簡が3点出土した駒首渦遺跡がある〔渡邊ほか 2009〕。いずれも低湿地の開発を主導した地元の有力者の集落と考えられる。

川根谷内遺跡に近接する古代の遺跡としては、井戸や溝状遺構などが検出された策木遺跡（85）〔龍田ほか 2018〕、「三宅」と書かれた墨書土器が出土した川根谷内墓所遺跡（95）〔江口 2001〕があり、水田跡が検出されていることから生産遺跡と考えられている。また、井戸と畝状遺構などが検出された牛道遺跡（33）も生産遺跡と考えられる〔立木（土橋）ほか 1999〕。このような居住域と生産域といった集落の様相を示す成果があった古代の遺跡は他にも多数あるが多くは10世紀中頃に途絶している。

中世 この地域で人々の活動が再び確認されるのは13世紀以降である。砂丘上の遺跡では、井戸や溝が検出された荒木前遺跡（18）がある〔渡辺 1991・川上 1996〕。付近の伝承を記録した『温古之栞』（温古談話会 1892）には「金津荘城所手代山に古城あり、孤主せし小山の頂上凡二千坪平坦にて井壺空壕の痕幽に見ゆ、元享年中（1321～1323）より上杉家の一将荒木五郎左衛門為久の居城とす。」とあり荒木氏の居館が存在していた可能性が考えられている〔川上 1996〕。また掘立柱建物跡や井戸・溝などが検出され、珠洲焼や越前焼などの中世陶器が出土した三王山遺跡（19）は、古代から中世にわたって営まれた遺跡と考えられる〔酒井 1980・朝岡ほか 2010〕。自然堤防上の中世遺跡としては、阿賀野川沿いの下郷南遺跡（91）がある。ロクロ成形底部ヘラ切りの土師器皿が土坑から200点以上一括出土し、阿賀北地域とのつながりを示した〔新潟市文化財センター 2015〕。永禄7（1564）年には、京都醍醐寺の僧侶が阿賀野川を下り、会津から新潟湊へ横越を経由して向かったことを記した『北国下り遺足帳』には「三十文・宿より送り衆・サケ・ヨココシニテ」というように横越について記されており〔大家 2003〕、交通の要地であったと考えられる。

近世 寛文8（1598）年加賀国大聖寺の溝口秀勝が新発田城主となって以来、横越島は新発田藩領となる。新発田藩は溝口秀勝の死後、秀勝の次男に1万2千石を分知し、沢海藩が創設された〔後藤 2003〕。新発田藩は、新田開発を積極的に行い、多くの新田村が開村したことが寛永16（1639）年に作成された「横越島絵図」から読み取ることが出来る。

川根谷内遺跡の所在する横越村は近世初頭に成立した村である。貞享4（1687）年、沢海藩溝口氏は改易され、廃藩、領地は幕府領となる。慶応3（1867）年頃の横越村の禄高は、亀田郷内で最大を誇った。

横越島は河川に囲まれており、水害の影響を受けることが多かった。川根谷内集落・横越村・亀田郷を中心としたこの地域の近世から現代の出来事と水害については第3表の年表を参照されたい。



新潟県地改良史掲載の横越島破堤分布図を基に作成

第3図 横越島地図

第3表 横越島水害年表

時代	西暦	年号	主な出来事と水害
近 世	1598	慶長 3 年	溝口秀勝、加賀国大聖寺より移され、新発田6万石の城主となる。この時亀田郷はすべてその領地となる。
	1610	慶長 15 年	新発田藩主溝口秀勝死去、2代直勝跡を継ぎ弟善勝に1万2000石を与え分知する（沢海藩成立）。この年、領内総検地を実施。
	1639	寛永 16 年	沢海藩領割野村と新発田藩領茅野山村との間に境界論争起り、領地替えを実施し、新たに沢海・茅野山・和田・舞瀧を沢海藩領とする。藩領替えのため「横越島絵図」が作成される。
	1655	明暦 元 年	新発田藩は検地を実施。沢海藩でも総検地を実施。
	1678	延宝 6 年	新発田藩、横越島を検地。
	1680	延宝 8 年	新発田藩領内大洪水。横越組、蒲原組、沼垂町などに手当を行う。
	1686	貞享 3 年	〔信濃川〕和田切れ。飢饉がおこる。
	1687	貞享 4 年	沢海藩溝口氏改易され、廃藩、領地は幕府領となる。
	1695	元禄 8 年	〔小阿賀野川〕割野切れ。
	1698	元禄 11 年	〔信濃川〕上和田切れ、水戸口200間余。
	1700	元禄 13 年	〔阿賀野川〕海老ヶ瀬切れ。
	1704	宝永 元 年	割野村で破堤。
	1712	正徳 2 年	〔阿賀野川〕海老ヶ瀬75間切れ。
	1723	享保 8 年	〔阿賀野川〕江口、沢海、横越の812間破堤。〔信濃川〕網川原146間切れ。〔小阿賀野川〕上木津100間切れ。
	1725	享保 10 年	〔阿賀野川〕江口83間切れ。
	1731	享保 16 年	〔阿賀野川〕江口大堤切れ。
	1732	享保 17 年	〔阿賀野川〕横越、小杉の間破堤。
	1736	元文 元 年	木津破堤。
	1737	元文 2 年	〔小阿賀野川〕二本木、上木津、沢海破堤。
	1738	元文 3 年	新発田藩横越村に横越組、蒲原組を合わせた横越組の治所を置く。
	1755	宝暦 5 年	この年、大洪水。
	1756	宝暦 6 年	〔小阿賀野川〕二本木破堤。
	1757	宝暦 7 年	〔信濃川〕下和田330間切れ。〔小阿賀野川〕二本木破堤。
	1778	安永 7 年	〔小阿賀野川〕沢海辰之口切れ。
	1779	安永 8 年	〔小阿賀野川〕上木津、中木津切れ。
	1781	天明 1 年	〔小阿賀野川〕沢海大堤切れ。
	1789	寛政 元 年	〔信濃川〕出来島97間切れ。〔小阿賀野川〕沢海大堤切れ。
	1792	寛政 4 年	〔小阿賀野川〕沢海切れ。
	1796	寛政 8 年	〔小阿賀野川〕沢海、上木津、下木津計155間切れ。
	1820	文政 3 年	〔小阿賀野川〕木津大堤切れ。
1822	文政 5 年	〔小阿賀野川〕木津切れ。	
1859	安政 6 年	〔信濃川〕曾川、枝郷、木津中島切れ。	
近 代	1870	明治 3 年	9月、越後北半部で村替えが実施され、亀田郷はすべて新潟県所属となる。
	1873	明治 6 年	7月、地租改正条例公布。
	1889	明治 22 年	4月、市制・町村制度実施のため町村合併を実施。石山村・木戸村・山潟村・曾野木村・鳥屋王村・女池村・和舞村・酒屋村・嘉瀬村・割野村・山岡村・山通村・大淵村・江口村が誕生。市制町村制実施される。新潟区、新潟市となる。横越村は5カ村分立。
	1893	明治 26 年	新潟県水利組合条例実施。水利、水害予防組合発足。亀田郷水利組合20、水害予防組合48成立。
	1894	明治 27 年	新栗ノ木川開削工事完成。
	1896	明治 29 年	〔小阿賀野川〕木津50間切れ。
	1897	明治 30 年	7・8月、木津破堤により栗ノ木川堤防破堤。
	1899	明治 32 年	4月、栗ノ木川石製閘門完成。
	1901	明治 34 年	県下町村で大合併実施。亀田郷では沼垂町・大形村・石山村・鳥屋野村・曾野木村・両川村・大江村・亀田町・横越村に整理される。横越、木津、沢海、小杉、二本木の5カ村が合併して横越村となる。
	1913	大正 2 年	〔小阿賀野川〕木津100間余切れ。
	1914	大正 3 年	亀田郷9000町歩を区域とする亀田郷水害予防組合成立する。
現 代	1915	大正 4 年	阿賀野川第1期改修工事着工（大正9年完工）。
	1917	大正 6 年	〔信濃川〕曾川60間余切れ。
	1948	昭和 23 年	6月、栗ノ木排水機場の運転が始まる。12月、亀田郷耕地整理組合設立。
	1949	昭和 24 年	10月、栗ノ木排水機場完工式。
	1951	昭和 26 年	11月、亀田郷耕地整理組合を改組し亀田郷土地改良区設立。
	1957	昭和 32 年	5月、曾野木村・両川・大江山村の3カ村が新潟市へ合併。下場に新潟操車場完成。
	1968	昭和 43 年	親松排水機場完成。

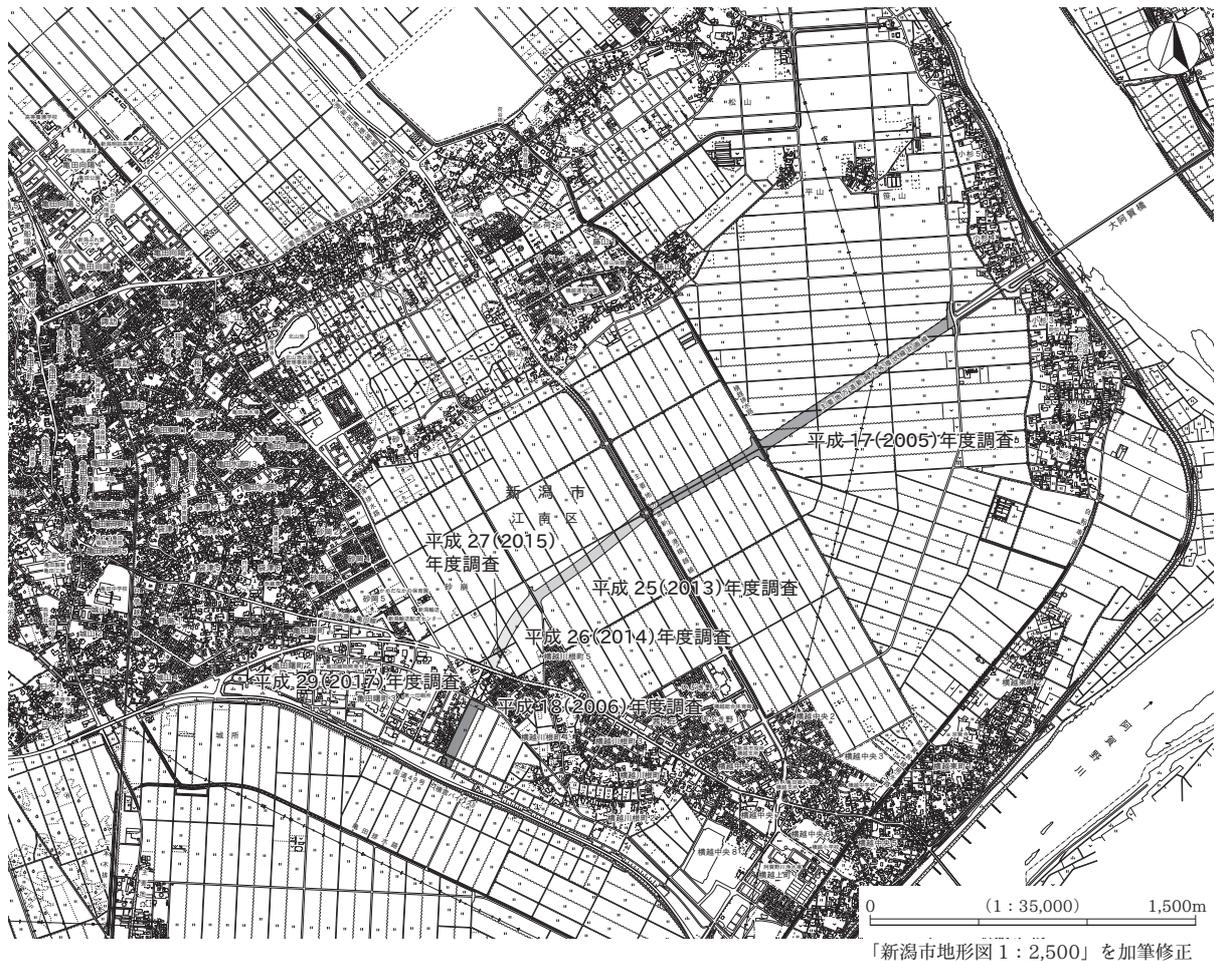
『新潟市合併市町村の歴史』〔新潟県合併市町村史1986〕、『新潟市域災害年表』〔南2002〕等を参考に作成

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 試掘・確認調査

主要地方道新潟中央環状線道路整備事業に伴う横越地区の試掘・確認調査は、平成17(2005)年度に調査対象面積97,000m²・調査面積720m²、平成18(2006)年度に調査対象面積12,000m²・調査面積78m²、平成25(2013)年度に調査対象面積31,000m²・調査面積290.3m²、平成26(2014)年度に調査対象面積19,000m²・調査面積376m²、平成27(2015)年度に調査対象面積1,500m²・調査面積61.63m²、平成29(2017)年度に調査対象面積6,700m²・調査面積217m²で、距離にして約3.0kmの調査が終了している(第4図)。トレンチの大きさは概ね2.0～3.0×3.0mであるが、平成25(2013)年度以降は調査結果に応じて大きさを変えている。上記トレンチの配置図及び本発掘調査範囲は第5図に、土層柱状図は第6図に示した。なお、第5・6図の各トレンチ番号に記載した最初の数字二桁は調査年度の西暦下二桁を表している。

平成25(2013)年度までの調査の結果、遺構・遺物ともに検出されていなかったが、平成26(2014)年度の試掘調査で築木遺跡が新たに発見・周知化され、追加の確認調査を平成27(2015)年度に行った。その結果、平成28(2016)年度に本発掘調査が行われている。また平成8(1996)年度に用水路改修工事に伴い遺跡範囲



第4図 新潟中央環状線(川根谷内遺跡)試掘・確認調査経緯図



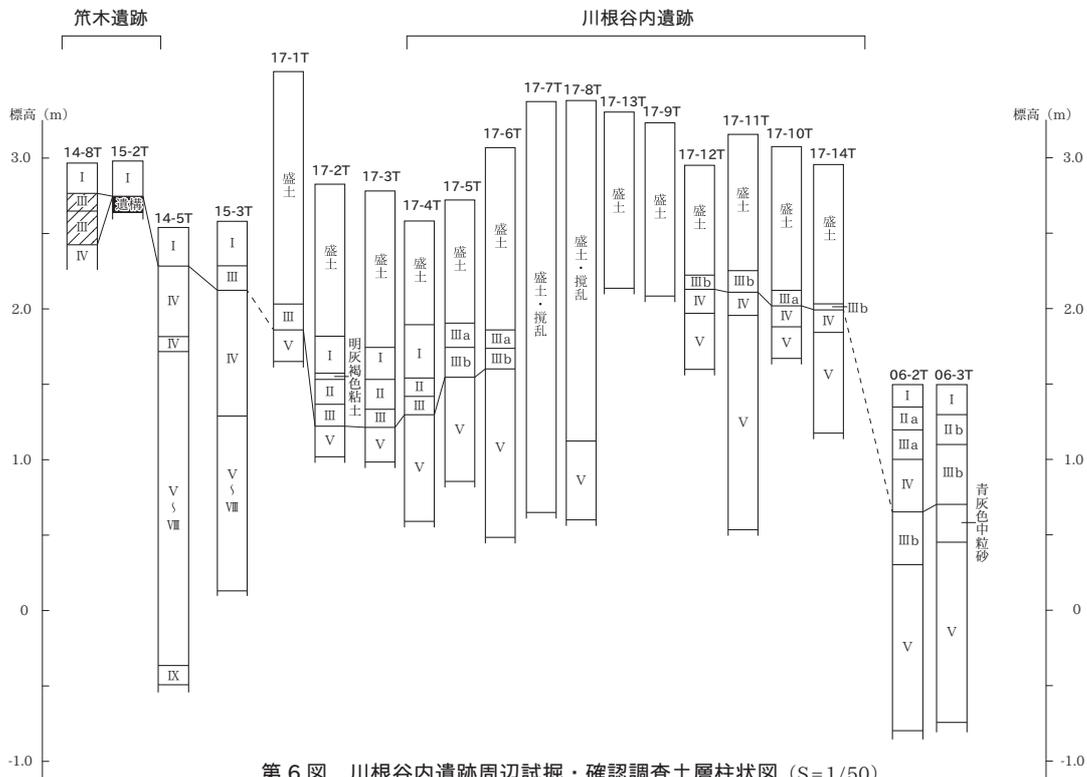
第5図 川根谷内遺跡周辺試掘・確認調査位置図

南側を66m²調査しているが、遺構・遺物ともに確認されていない。

平成29(2017)年度の試掘調査は、平成29年9月19日から22日までの延べ4日間実施した。14カ所の試掘坑を(17-1～14T)を調査した結果、2カ所の試掘坑で遺構、6カ所の試掘坑で遺物を確認した。遺構は、11・12Tの黒灰色粘土(Ⅲa・b層)及び褐灰色シルト(Ⅳ層)下面の現地表下1.0～1.3mで検出され、内容は溝1条、畝状構造、不明な落ち込みである。11Tから溝、12Tから畝状構造、不明な落ち込みが確認された。遺物は4・5・10・11・12・14Tの主にⅢ層から出土しており、主として平安時代の須恵器甕、土師器碗などである。具体的には4Tから須恵器1点、5Tからは須恵器1点・土師器1点、近世陶磁器1点、10Tから須恵器1点、土師器20点、11Tから土師器17点、12Tから須恵器1点、土師器4点、14Tから須恵器1点、土師器1点がそれぞれ出土した。以上の結果から、川根谷内遺跡の範囲を遺構・遺物が確認された10・11・12・14T方向の北西側に拡張した。

平成29年度の試掘調査及び過去の中央環状線関係の試掘・確認調査結果を南北にみると、14-8T、15-2T、14-5T、14-3Tで筑木遺跡の基盤層であるⅣ層は南側に向かって下がっていく。17-1～3Tでは基盤層であるⅤ層(本調査のⅢ層)がさらに落ち込み、17-4～6Tでは若干高くなり、今回の本発掘調査範囲に該当する12・11・10・14T部分では再び高くなる。さらに南側の06-2・3Tでは基盤層と考えられるⅤ層が再び下る。このことは、1～6Tの部分が米軍写真(写真図版1)などで確認できる、阿賀野川の支流である旧河道部分にあたり、筑木遺跡・川根谷内遺跡は兩岸の自然堤防に立地することを示す堆積状況と考えられる。

このような結果から、遺構・遺物が確認され、工事により影響のある幅約12m、延長約60m、面積780.18m²の範囲(第5図①)は、記録保存のための本発掘調査を実施することとなった。なお、第5図②の範囲は攪乱の影響が強く、工事で掘削を伴わない歩道部分であることから、本発掘調査対象範囲に含めないこととした。試掘調査範囲中央を北西-南東方向にはする排水路以北の第5図③の範囲は、未買収地が存在するため用地取得後に追加の確認調査を実施し、その結果をもって本発掘調査の要否を判断することとした。その後、本発掘調査の結果から、第5図③の範囲に遺跡の広がり認められない可能性が高いと考えられたため、発掘調査不要と判断した。



第6図 川根谷内遺跡周辺試掘・確認調査土層柱状図 (S=1/50)

第2節 本発掘調査

A 調査方法

1) 調査前の状況

発掘調査範囲の現況は工場の資材置場であり、それ以前は水田耕作地として利用されていた。現標高は調査区のほぼ中央で3.5mである。

2) グリッドの設定 (図版4)

本調査のグリッドは、平成27(2015)年度筑木遺跡本発掘調査時のグリッドと同一グリッドを延長して設定したため、両者は対応する(測地成果2011)。

基準点に対して国土地理院の第Ⅶ系座標軸を用いて10mの方眼を組み、これを大グリッドとした。大グリッド名称は北西隅の1A杭を起点として南北方向をアラビア数字、東西方向をアルファベットとし、この組み合わせによって表示した。大グリッドをさらに2m方眼に区分して1から25の小グリッドに分割し、「25I25」のように呼称・表示した。1A杭はX座標：206,700.000、Y座標：55,400.000、緯度：37°51′39.82077″、経度：139°07′46.63268″である。基準杭の打設は測量業者に委託した。

発掘調査区の座標は次のとおりである。

24I 杭

(X座標：206,460.000、Y座標：55,480.000、Z座標：2.408、緯度：37°51′32.34308″、経度：139°07′49.84206″)

25I 杭

(X座標：206,470.000、Y座標：55,480.000、Z座標：2.384、緯度：37°51′32.01873″、経度：139°07′49.83930″)

25I杭で、座標北は真北に対して0度23分13.08秒東偏し、磁北は真北に対し8度22分西偏する。

3) 調査方法

① 表土掘削：これまでの試掘調査の成果から、遺構確認面がⅡ層以下にあることが判明していたため、Ⅰ層(セメント工場の造成に伴う盛土)を重機(バックホウ)により除去した後、Ⅱ層上面で(水田耕作層・包含層相当層)水田畦畔の検出作業おこなった。排土は、調査区西側に借地をして仮置きした。また、湛水防止のため、表土掘削と並行して調査区の西壁から20cmほど離して幅20cm程度の土側溝を掘り2時のポンプで強制排水を行った。

② 包含層掘削・遺構検出・発掘：重機で表土除去の後、ジョレン等を用いて人力で精査を行い、包含層の掘削・遺構の検出にあたった。排土はベルトコンベアーもしくは人力で調査区外に搬出した。

③ 実測・写真：実測図は断面図を1/20で作成した。平面図や各種測量点は測量業者に委託してトータルステーションを用いて作成し、あわせてラジコンヘリコプターにより俯瞰写真を撮影した。写真撮影は35mm版、6×7版のフィルムカメラ及びデジタル一眼レフカメラを用い、白黒フィルム・カラーポジフィルムを適宜併用した。

④ 遺物取り上げ：包含層出土遺物は小グリッド単位として取り上げた。遺構出土遺物は点数が少ない地点が多く、層位ごとを一括で取り上げた。

⑤ 自然科学分析：花粉分析・植物珪酸体分析の科学分析を行った。

B 調査経過

平成30年7月18日から諸準備を開始した。駐車場・排水路の使用・排土置場の借地等の協議を行い、準備工として7月27日からプレハブ・機材庫、8月1日に重機・クローラーダンプ・敷鉄板を搬入し、コンクリート廃棄物除去を開始した。その結果、調査区南半の攪乱が著しいことを確認した。このため調査区北半を全面的に掘削し、南半ではトレンチを設定して調査することとした。表土掘削を8月20日から調査区北側より開始し、調査区中央までを9月7日に完了した。重機掘削と並行して作業員約13名で排水路掘削、法面仕上げ、Ⅱ

第3節 整理作業

b層の人力掘削及び遺構検出作業を開始した。9月13日より遺構の掘削・写真撮影・計測を開始した。

9月12日に調査区南半にトレンチ3カ所を設定・掘削・記録を行った。すべてのトレンチでII b層の堆積が確認されたが、攪乱の影響が大きく、遺構・遺物は検出されなかった。

9月26日に遺構調査・記録作業を完了した。10月6日に現地説明会を開催した。その後、現地説明会片付け、空中写真撮影に備えた清掃作業等を行い、10月12日にラジコンヘリコプター及び高所作業車による調査区全体の撮影を行った。撮影後、10月15日に土層確認のための深掘りを行い、自然科学分析のサンプリング採取、測量、写真撮影の後、埋め戻しを行い、現地調査を終了した。調査終了後に11月3日までに調査区の埋め戻し作業とコンクリート廃棄物の搬出・産廃処理を行った。12月3日までにプレハブ・倉庫・トイレなどを撤去し、12月4日引き渡しを行った。

最終的な発掘調査面積は、上端面積 821.6m²、下端面積 684.2m²である。

C 調査体制

【平成29年度 第5次調査（試掘調査）】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長 前田秀子）
主管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 （課長：藤井希伊子 課長補佐：廣野耕造 埋蔵文化財担当主査：朝岡政康） 新潟市文化スポーツ部文化財センター （所長：外山孝幸 課長補佐：福地康郎 渡邊朋和）
調査員	調査担当 潮田憲幸（歴史文化課主査）

【平成30年度 第6次調査（本発掘調査・整理作業）】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長 前田秀子）
主管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 （課長：小沢昌己 課長補佐：廣野耕造 埋蔵文化財担当主査：朝岡政康） 新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター （所長：渡邊朋和 主幹：天野泰伸 遠藤恭雄）
調査担当	牧野耕作（新潟市文化財センター文化財専門員）
調査員	脇本博康（株式会社吉田建設）

第3節 整理作業

A 整理方法

1) 遺物

遺物量はコンテナ(内径54.5×33.6×10.0cm)にして6箱である。奈良・平安時代の土器、近世から近代の陶磁器、鉄製品・石製品などの遺物がある。

遺物の整理作業は次の手順で行った。①洗浄。②注記。③遺構：遺物の器種別の重量・個体数計測。④接合。⑤報告書掲載遺物の抽出。⑥実測図作成。観察表作成。⑦トレース図作成。⑧仮割付作成。⑨版下作製。このうち⑦と⑨は業者に委託してデジタル編集をした。

2) 遺構

平面図を作成するにあたっては、まず測量業者に委託した1/20の遺構平面図と手取り断面図との校正作業を行った。報告書の1/60と1/40の遺構平面図は測量業者が作成し、デジタルデータとした。

B 整理経過

平成 30 年度の発掘調査と並行して出土遺物の水洗を行った。現地調査終了後に本格的な報告書作成作業に入り、出土遺物の注記・計測・接合・実測作業と写真・図面整理、測量業者に委託した遺構平面図の校正、遺物写真の撮影、図版のレイアウト作業を支援業務受託した株式会社吉田建設が主体となって行った。報告書の執筆・編集作業は、市調査担当と株式会社吉田建設が行った。遺構平面図は測量業者作成のデジタルデータを用いた。各種図版のデジタルトレース等図版作成・編集作業、自然科学分析については、業者に委託した。

平成 30 年度の調査終了後の整理体制については、第 2 節の調査体制を継続した。

報告書の印刷刊行は平成 30 年度に行った。

第Ⅳ章 遺 跡

第 1 節 概 要

川根谷内遺跡は旧河道の自然堤防上に立地する。現況は工場の資材置場である。遺跡全体の標高は、現水田面で 3.1 ～ 3.7m を測り、北から南にかけて緩やかに下がっていく。今回の調査地点は、川根谷内遺跡の範囲西端付近である。出土遺物は奈良・平安時代のうち 9 世紀代のものが主体を占めるが、小片で摩滅も激しいものが多く、全体を復元できる資料は少ない。その他は近世以降の遺物が少量見られる。

調査区は昭和 20 年代の耕地整理の影響で削平を受けているため、北端部に旧河道の落ち込みとみられる性格不明遺構が検出された以外は、全面が旧耕作田と考えられる水田遺構である。遺物量はコンテナ（内径 54.5×33.6×10.0cm）換算で 6 箱となる。

第 2 節 層 序（図版 12・13、写真図版 6）

本調査の基本層序は調査区外周の AA' から FF' の任意の 6 点で観察・記録した。本来堆積していたと考えられる古代の遺物包含層は、後世の耕地整理などにより削平された可能性が高く、遺存していない。各観察地点では、色調・含有物などに若干相違が認められるが、基本的に共通している。

I 層：表土、攪乱、盛土。

Ⅱa 層：黒褐色シルト（10YR3/1）粘性強く、しまりあり。Ⅲ層を斑状に少量含む。古代・近世の遺物が出土する。また近現代以降の遺物も出土する。平成 29（2017）年度試掘調査のⅢa 層に相当する。包含層相当層。

Ⅱb 層：黒褐色シルト（2.5Y3/1）粘性強く、しまりあり。Ⅲ層を斑状に多量に含む。旧耕作土であり、Ⅲ層が耕作により攪拌された様子が確認できる。古代・近世の遺物が出土する。平成 29（2017）年度試掘調査のⅢb 層に相当する。包含層相当層。

Ⅲ 層：青灰色シルト（5BG6/1）粘性あり、しまりあり。植物痕による黒褐色シルト、鉄分を斑状に含む。本来、古代の遺構確認面と考えられる。平成 29（2017）年度試掘調査のⅣ層に相当する。地山である。

Ⅳ 層：明緑灰色～灰白色粘質シルト（10G7/1～10YR/8/2）粘性強く、しまり弱い。鉄分を斑状に含む。Ⅳ層以下は試掘調査のⅤ層に相当する。

Ⅴ 層：灰白色粘質シルト（10YR/8/2）粘性強く、しまり弱い。鉄分を斑状に含む。

Ⅵ 層：灰白色砂質シルト（10YR/8/2）粘性弱く、しまり弱い。

Ⅶ 層：緑灰色砂質シルト（10G6/1）粘性弱く、しまりなし。

Ⅷ 層：灰白色砂質シルトと粘質シルトの互層（10YR/8/2）

第 3 節 遺 構 各 説

遺構番号は遺構の種別に関わらず通し番号を付したが、遺構でないと判断したものについては欠番とした。説明は種別ごとにし、畦畔、水田、性格不明遺構（SX）の順に記す。遺跡全体で検出された遺構数は畦畔 4 条、水田 1 基、性格不明遺構 1 基である。遺構の形態分類は水田、性格不明遺構については、大まかに円形・楕円形・方形・長方形・不整形の 5 種類に、断面形は皿形・半円形・台形状・箱形の 4 種類に分類し、調査区外へ延び

る遺構については現存値を記した。遺構の計測値等は別表1に記し、詳細な説明は一部省略している。

調査区内は標高1.58～3.10mを測り、遺構は調査区の中央部分の標高1.75～2.14mの範囲に集中している。上端面積821.6m²、下端面積684.2m²である。また、畦畔については、擬似畦畔と思われるものは「擬似畦畔A」を水田畦畔直上に認められる自然堆積層の高まりとしており、「擬似畦畔B」は水田畦畔直下層（自然堆積層）上面に認められる高まりについての認識である〔佐藤1999〕。これらの遺構からは近世の遺物が出土しているため、その年代については、近世以降と考えられる。

畦畔5（図版8・14、写真図版7）

23I22・23、24I1・2・3・6、24H10・14・15に位置する。南西側を17-12Tと攪乱に切られる。確認面はⅢ層である。主軸方向はN-50°-Eで、現存している上端の長軸8.30m・短軸0.30m・高さ0.05～0.15m、上端幅0.30～0.45m・下端幅0.60～0.80mを測る。断面は台形状で、畦畔の覆土はⅢ層の削り出しである。

畦畔6（図版8・9・14、写真図版7）

24H24・25、25H3・4・8に位置する。確認面はⅢ層である。主軸方向はN-47°-Eで、北東側を攪乱に切られ、南西側は調査区外へ延びる。現存している上端の長軸4.85m・短軸0.05m・高さ0.01～0.05m、上端幅0.02～0.25m・下端幅0.20～0.46mを測る。断面は台形状で、畦畔の覆土はⅢ層の削り出しである。畦畔の直上に暗渠の痕跡が確認できるため、擬似畦畔Bであると考えられる。

畦畔7（図版8・9・14、写真図版7）

24I21・22、25I1、25H5・9・10・12～14・16～18・21・22、25G25、26G5に位置する。確認面はⅢ層である。主軸方向はN-50°-Eで、北東側を攪乱に切られ、南西側は調査区外へ延びる。現存している上端の長軸18.60m・短軸0.31m・高さ0.02～0.18m、上端幅0.31～0.49m・下端幅0.62～0.85mを測る。断面は台形状で、畦畔の覆土はⅢ層の削り出しである。

畦畔8（図版8・9・14、写真図版7）

25H15・19・20・23・24、25I6・7・11、26H3に位置する。確認面はⅢ層である。主軸方向はN-50°-Eである。現存している上端の長軸9.90m・短軸0.16m・高さ0.02～0.12m、上端幅0.16～0.40m・下端幅0.46～0.62mを測る。断面は台形状で、畦畔の覆土はⅢ層の削り出しである。

水田9（図版8・9・14、写真図版3・4）

23H24・25、23I18・21～24、24H4・5・8～10・13～15・17～20・22～25、24I1～4・6～9・11～14・16・19・21～23、25H1～25、25G20・25、25I1・2・6・7・11・12・16・21、26G5・10、26H1～5・6・9に位置する。調査区北半すべてのグリッドが該当すると考えられる。確認面はⅡb層である。主軸方向はN-50°-Eで北東側、北西側で17-12Tや攪乱に切られる。現存している下端の長軸28.60m・短軸8.80mである。断面は逆台形状である。北側から畦畔5・畦畔6・畦畔7・畦畔8によって区画されているが、北西から南東に区画された畦畔が検出されなかったため、大区画の水田の一部であると考えられるが詳細は不明である。

SX1（図版8・13・14、写真図版7）

23H15・20・25、23I1・6・7・11～13・16～18・21～23に位置する。確認面はⅡa層である。主軸方向は不明で、平面形は不整形と考えられる。現存している断面は皿形で3層に分かれる。確認面において現存している長軸5.56m・短軸5.02m、深さ0.32mを測る。川根谷内遺跡の北方を流れていた旧河道の痕跡であると考えられる。遺物は1・2層から近世陶器・土師器・須恵器の碎片・軽石が少量出土している。

第V章 遺 物

第1節 概 要

川根谷内遺跡からは古代（奈良・平安）の土器、近世から近代の陶磁器、鉄製品・石製品が出土している。遺物出土総量は、コンテナ（内法54.5×33.6×10.0cm）に6箱である。

すべての遺物は包含層相当層であるⅡa、Ⅱb層からの出土である。

遺物は古代のうち、平安時代（9世紀前期～後期）の土師器・須恵器が主体で、編年的位置づけや時期区分については春日編年〔春日1999・2000・2005〕Ⅴ～Ⅵ期の所産であると考えているが、細片が多く明確な判断が下せないものも多かった。

出土遺物の記述については、土器・鉄製品の順とした。また、土器の成形・調整技法の表現・名称は、山三賀Ⅱ遺跡〔坂井ほか1989〕の所見を参考に下記のとおりとした。

「ロクロナデ」－ロクロ・回転台使用、「ナデ」－ロクロ・回転台未使用。

「ロクロケズリ」－ロクロ・回転台使用、「ケズリ」－ロクロ・回転台未使用。

「カキメ」－ロクロ・回転台使用、「ハケメ」－ロクロ・回転台未使用。

「ロクロミガキ」－ロクロ・回転台使用、「ミガキ」－ロクロ・回転台未使用。

「タタキメ」－外面、「あて具」－内面。

底部切り離し技法の「ヘラ切り」「糸切り」はロクロの回転を利用したものである。「回転ヘラ切り」と称すべきであるが、「回転」は省略した。

第2節 試掘調査出土遺物（図版15・写真図版8）

平成29年度の試掘調査で出土した遺物については、出土した試掘坑・点数・器種等は第Ⅲ章第1節に記したとおりである。

出土遺物のうち須恵器甕4点（試掘1～4）を図示した。試掘1は頸部から肩部、試掘2～4は胴部片である。試掘1は17-4TⅢa層（本発掘調査Ⅱa層）出土で、焼成は良好である。外面は肩部表面が9割ほど剥離しており、頸部のロクロナデのみ調整がみられる。内面は体部にあて具痕、頸部にロクロナデがみられる。試掘2は17-5TⅢa層（本発掘調査Ⅱa層）から出土した。外面に格子状タタキ、内面に同心円あて具痕がみられる。焼成は良好である。試掘3は17-10TⅢb層（本発掘調査Ⅱb層）から出土した。内外面に平行タタキがみられる。表面の焼成は良好だが、内部は弱い。試掘4は17-14TⅢb層（本発掘調査Ⅱb層）から出土し、内外面に平行タタキがみられる。焼成は良好である。

第3節 本発掘調査出土遺物（図版15・写真図版8）

本発掘調査で出土した、土師器無台椀（1～3）、土師器長甕（4・5）、土師器鍋（6）、須恵器杯蓋（7・8）、須恵器無台杯（9）、須恵器有台杯（10～12）、須恵器長頸壺（13）、鉄製品（14）を図示した。遺構出土遺物はなく、すべて包含層相当層であるⅡa・b層出土である。

1は土師器無台椀で、24H10のⅡb層から出土した。底部から体部までの破片で、底部から緩やかに立ち上がる。

内外面にロクロナデが施され、底部はヘラ切り後ナデが施されていると思われるが、摩滅しており判別しがたい。

2は土師器無台椀で、25H21のⅡb層から出土した。底部から体部までの小片で、底部から緩やかに立ち上がる。全体的に摩耗しているため内外面の調整加工は明瞭でない。

3は土師器無台椀で、25I11のⅡb層から出土した。底部から体部までの小片で、内外面にロクロナデが施され、底部はヘラ切りが施されていると思われる。

4は土師器長甕で、25H3のⅡb層から出土した。口縁部分のみの小片である。口縁部は肥厚している。内外面にロクロナデが施される。

5は土師器長甕で、25H21、25I16のⅡb層から出土した。口縁部のみの小片資料である。頸部で外傾し、口縁端部は、垂直に立ち上がる。内外面にロクロナデが施される。

6は土師器鍋小片で、24H4のⅡb層から出土した。口縁から体部までの資料である。頸部は「く」字状にゆるく外反し、口唇部は欠損していて明瞭ではない。口縁端部は垂直に立ち上がると思われる。内外面にロクロナデが施される。

7は須恵器杯蓋のつまみ部分のみの資料で、25H3のⅡb層から出土した。つまみの中央部は浅く凹む。内外面にロクロナデが施される。佐渡小泊窯跡産と考えられる。

8は須恵器杯蓋のつまみ部分のみの資料で、23I11のⅡb層から出土した。つまみは浅く凹み、中央部ではわずかな突起が認められる。内外面にロクロナデが施される。佐渡小泊窯跡産と考えられる。

9は須恵器無台杯の縁部の破片資料である。23I17のⅡb層から出土した。器壁は薄く、内外面にロクロナデが施される。

10は須恵器有台杯の底部から体部までの資料である。23I6のⅡa層から出土した。内外面にロクロナデが施され、底部はヘラ切り後ナデが施され、貼付高台が付く。佐渡小泊窯跡産と考えられる。

11は須恵器有台杯の底部から体部までの資料である。25H23、26H6のⅡb層から出土した。内外面にロクロナデが施され、底部はヘラ切り後ナデが施され、貼付高台が付く。佐渡小泊窯跡産と考えられる。

12は須恵器有台杯で、25H3のⅡb層から出土した。底部から体部までの資料である。全体的に摩耗しているが内外面にロクロナデが施され、底部は貼付高台が付く。焼成は不良である。佐渡小泊窯跡産か。

13は須恵器長頸壺の口縁部から頸部までの資料である。23H25、24H4のⅡa層から出土した。器壁は薄く、内外面にロクロナデが施される。佐渡小泊窯跡産と考えられる。

14は和釘で、23H20のⅡa層から出土した。錆が著しく表面を覆っているためほぼ完品であると思われるが詳細は不明である。

なお、包含層相当層から出土した陶磁器については、写真図版8、別表2にあるとおりである。

15は肥前の瓶と考えられる。23I16のⅡa層から出土した、底部から体部までの資料である。透明釉が施されている。

16は陶器挿鉢の底部から体部までの資料である。24I1のⅡa層から出土した。鉄釉が施されている。産地は在地の窯で、時代は近代の可能性はある。

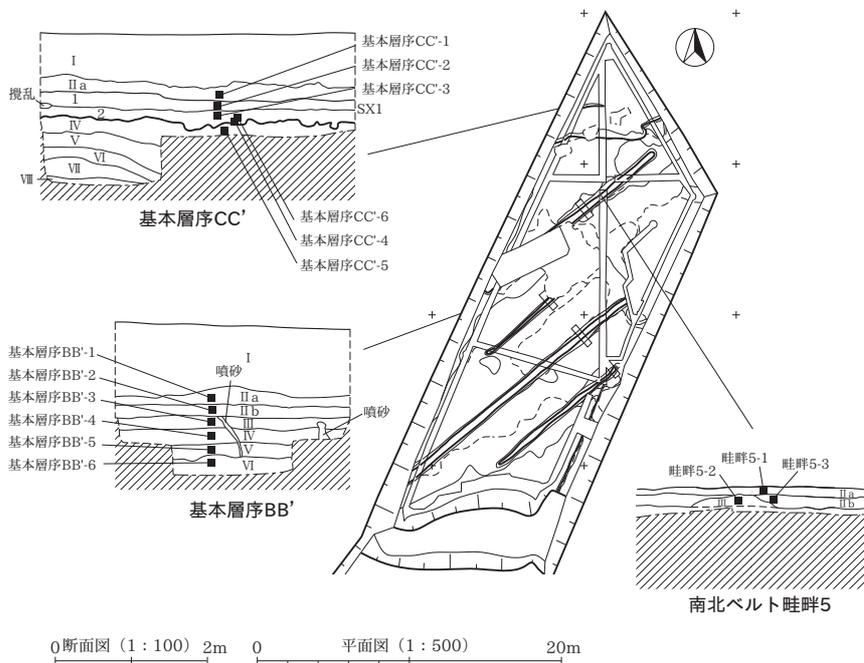
17は陶器の鉢の底部付近の資料である。25G25のⅡb層から出土した。白釉が施されている。産地は在地の窯で、時代は近代の可能性はある。

第VI章 自然科学分析

第1節 花粉分析とプラント・オパール分析

A はじめに

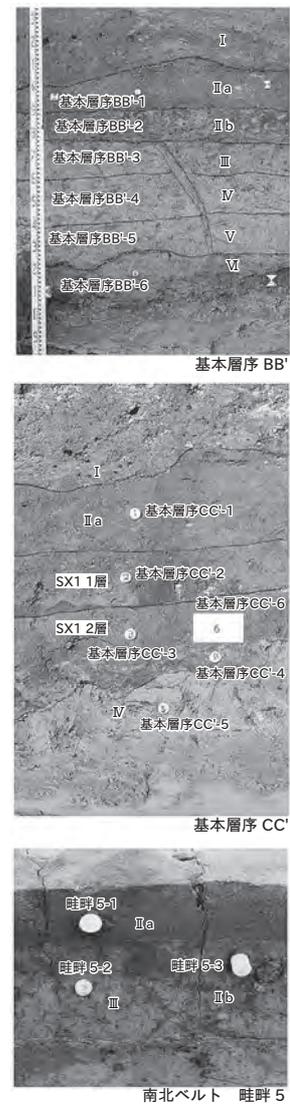
川根谷内遺跡は旧自然堤防上の微高地に立地する奈良・平安時代の遺跡であり、畦畔や性格不明遺構などが検出されている。この遺跡の古植生を検討するために、花粉分析とプラント・オパール分析用の試料が採取された。以下では、採取された試料について行った花粉分析とプラント・オパール分析の結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。



第7図 自然科学分析試料採取地点

第4表 分析試料一覧

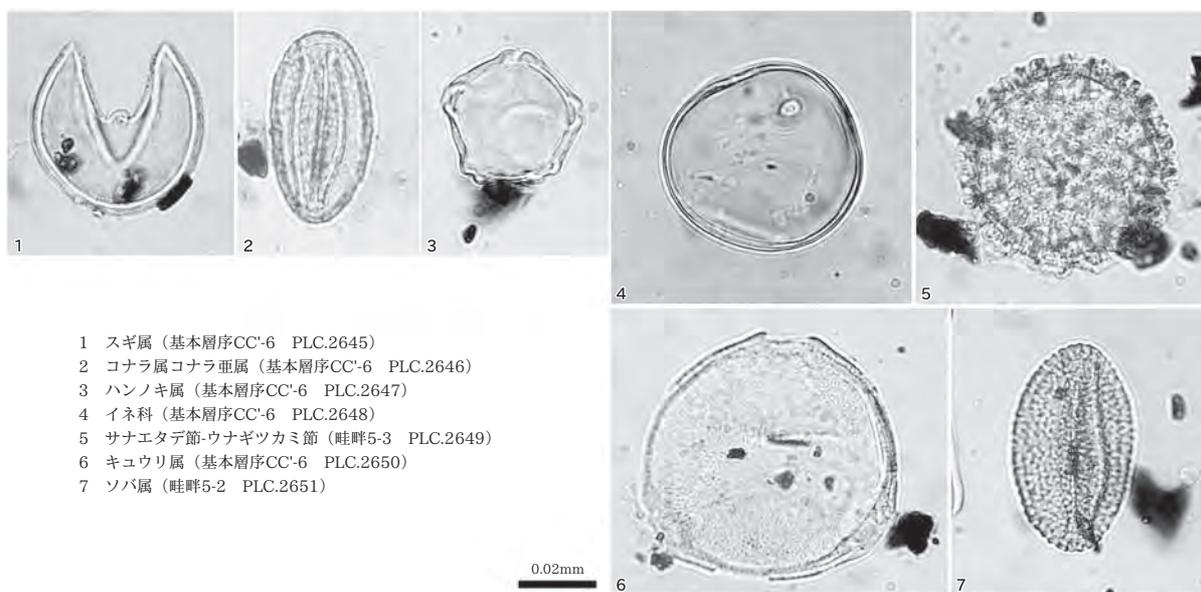
位置	試料 No.	層位	時期	岩質	備考	花粉	プラント
基本層序 BB'	BB'-1	IIa	近代	黒褐色 (10YR3/1) シルト	耕作土	○	○
	BB'-2	IIb	近代	黒褐色 (2.5Y3/1) シルト		○	○
	BB'-3	III	古代	青灰色 (5BG6/1) シルト	古代の遺構確認面	○	○
	BB'-4	IV		青灰色～灰白色 (10G7/1 ~ 10YR8/2) 粘質シルト		○	○
	BB'-5	V		灰白色 (10YR8/2) 粘質シルト		○	○
	BB'-6	VI				○	○
基本層序 CC'	CC'-1	IIa	近代	黒褐色 (10YR3/1) シルト	耕作土	○	○
	CC'-2	SX1 1層	近世	褐色 (10YR4/1) シルト	水田耕作土	○	○
	CC'-3			○		○	
	CC'-4	SX1 2層		褐色 (10YR5/1) シルト		○	○
	CC'-6			○		○	
	CC'-5	IV		青灰色～灰白色 (10G7/1 ~ 10YR8/2) 粘質シルト		○	○
南北ベルト 畦畔5	5-1	IIa	近代	黒褐色 (10YR3/1) シルト	耕作土	○	○
	5-3	IIb	近代	黒褐色 (2.5Y3/1) シルト		○	○
	5-2	III	古代	青灰色 (5BG6/1) シルト		古代の遺構確認面	○



第8図 分析試料採取層準

第5表 産出花粉孢子一覧表

学名	和名	基本層序CC'-6	畦畔5-1	畦畔5-3	畦畔5-2
樹木					
<i>Abies</i>	モミ属	—	—	—	3
<i>Tsuga</i>	ツガ属	—	—	2	1
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	26	58	34	22
<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxylon</i>	マツ属単維管束亜属	1	—	—	—
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	—	—	—	3
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	105	90	105	43
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1	2	—	—
<i>Pterocarya-Juglans</i>	サワグルミ属-クルミ属	4	3	3	7
<i>Carpinus-Ostrya</i>	クマシデ属-アサダ属	—	2	3	4
<i>Corylus</i>	ハシバミ属	—	1	—	—
<i>Betula</i>	カバノキ属	3	4	3	4
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	57	21	23	58
<i>Fagus</i>	ブナ属	5	4	3	2
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	18	6	15	5
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガン亜属	2	2	1	—
<i>Castanea</i>	クリ属	2	2	1	1
<i>Ulmus-Zelkova</i>	ニレ属-ケヤキ属	3	4	7	—
<i>Celtis-Aphananthe</i>	エノキ属-ムクノキ属	—	—	1	—
<i>Mallotus</i>	アカメガシワ属	—	—	2	—
<i>Rhus-Toxicodendron</i>	ヌルデ属-ウルシ属	—	—	1	—
Celastraceae	ニシキギ科	1	—	—	—
<i>Aesculus</i>	トチノキ属	1	—	—	—
<i>Vitis</i>	ブドウ属	—	1	—	—
<i>Elaeagnus</i>	グミ属	—	1	—	—
Araliaceae	ウコギ科	—	1	—	—
<i>Cornus</i>	ミズキ属	—	1	—	—
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	—	—	1	—
草本					
<i>Typha</i>	ガマ属	1	—	—	—
<i>Alisma</i>	サジオモダカ属	1	—	—	2
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	1	1	—	—
Gramineae	イネ科	499	422	723	135
Cyperaceae	カヤツリグサ科	2	6	5	5
Moraceae	クワ科	—	1	—	—
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	サナエタデ節-ウナギツカミ節	—	—	1	—
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	—	—	—	2
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	4	3	8	21
Caryophyllaceae	ナデシコ科	2	—	3	8
Brassicaceae	アブラナ科	9	2	27	80
<i>Rotala</i>	キカシグサ属	2	—	—	—
Apiaceae	セリ科	1	—	—	—
<i>Plantago</i>	オオバコ属	1	—	—	1
<i>Cucumis</i>	キュウリ属	1	—	—	—
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	12	13	17	27
Tubuliflorae	キク亜科	—	1	2	1
Liguliflorae	タンポポ亜科	—	—	—	9
シダ植物					
monolete type spore	単条溝孢子	7	25	17	619
trilete type spore	三条溝孢子	—	2	1	22
Arboreal pollen	樹木花粉	229	203	205	153
Nonarboreal pollen	草本花粉	536	449	786	291
Spores	シダ植物孢子	7	27	18	641
Total Pollen & Spores	花粉・孢子総数	772	679	1009	1085
Unknown pollen	不明花粉	2	1	4	5



第10図 産出した花粉化石

さらに、クワ科の花粉には樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

樹木花粉では、いずれの試料においてもマツ属複雑管束亜属やスギ属、ハンノキ属などの産出が目立つ。このうち、ハンノキ属に関しては近代の層準（Ⅱa層、Ⅱb層：畦畔 5-1、5-3）でやや産出率が減少する。草本花粉では、イネ科の産出が目立つが、古代の層準（Ⅲ層：畦畔 5-2）では産出率が低い。その他にもソバ属（Ⅲ層：畦畔 5-2）やキユウリ属（SX1の2層：基本層序 CC'-6）などの栽培植物の産出も見られた。

2) プラント・オパール分析

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料 1g 当りの各プラント・オパール個数を求めた。一覧表を第 6 表に、植物珪酸体分布図を第 11 図に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は、試料 1g 当りの検出個数である。

15 試料の検鏡の結果、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、他のタケ亜科機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の 7 種類の機動細胞珪酸体が確認できた。その他にも、イネの籾殻で形成されるイネ類破片も検出された。

イネ機動細胞珪酸体に注目すると、いずれの地点もⅢ層以下の層準では産出が見られないが、SX1の1層や2層、Ⅱa層、Ⅱb層では多くのイネ機動細胞珪酸体が産出している。

D 考 察

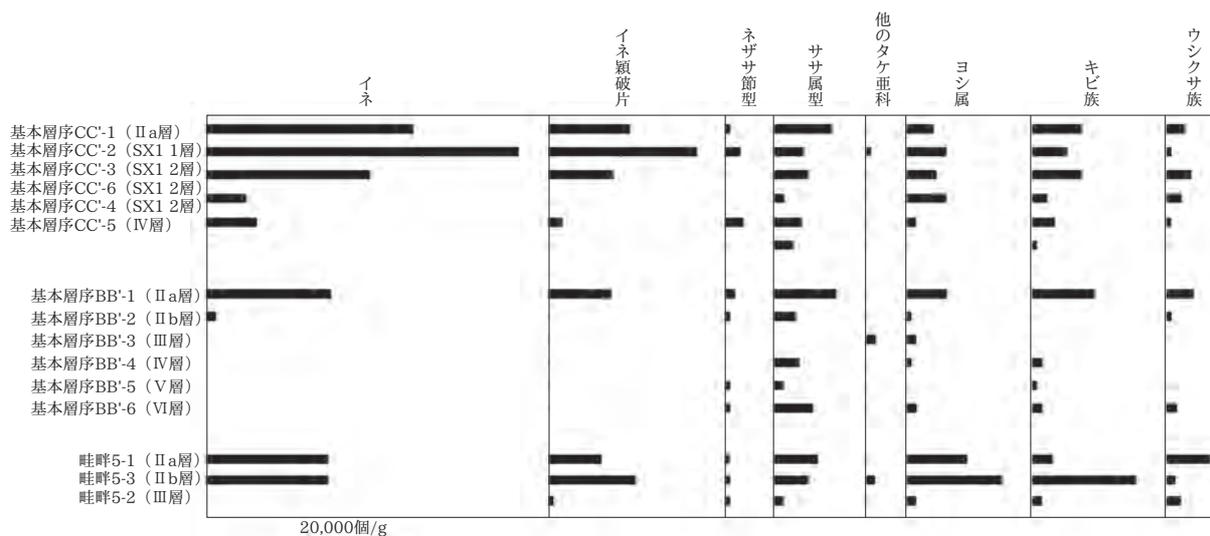
1) 古 植 生 変 遷

以下では、花粉分析とプラント・オパール分析の結果を踏まえ、下位層から古植生について検討する。

Ⅵ層から古代と考えられているⅢ層までの層準では、いずれの地点においてもササ属型やキビ族、ウシクサ族、ヨシ属などの機動細胞珪酸体が産出している。古代以前の遺跡周辺の森林の下草としてササ属のササ類が、開けた場所にはキビ族やウシクサ族が分布し、抽水植物のヨシ属が生育できる湿地的環境の場所も存在していたと思われる。なお、樹木花粉が 200 に達しなかったものの、畦畔 5-2（Ⅲ層）の花分析結果では、落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属やクマシデ属ーアサダ属、サワグルミ属ークルミ属などが産出しており、こうした落葉広葉樹林の下草としてササ属が生育していた可能性がある。さらに、畦畔 5-2（Ⅲ層）では、樹木花粉でハンノキ属の産出が目立ち、草本花粉では水生植物のサジオモダカ属を伴っているため、湿地的環境の場所にはヨシ属ばかりではなく、ハンノキ属の湿地林や、サジオモダカ属などの水草も生育していたと考えられる。また、畦畔 5-2（Ⅲ層）ではマツ属複雑管束亜属やスギ属、イネ科、アブラナ科、ヨモギ属などの産出も目立つため、古代の遺跡周辺の丘陵地などにはニヨウマツ林やスギ林が、畦畔 5 の周辺にはイネ科やアブラナ科、ヨモギ属などの草本類が分布を広げていたと考えられる。このうち、アブラナ科は、ナズナ等の野生種やダイコン、カブといった栽培種が含まれる分類群である。花粉形態で野生種か栽培種かを見分けるのは難しいため、断定はできないが、畦畔 5-2（Ⅲ層）ではアブラナ科の花粉が他の層準に比べると比較的多く産出しており、遺跡周辺でアブラナ科の栽培が行われていた可能性がある。その他にも、畦畔 5-2（Ⅲ層）では栽培植物のソバ属が検出された。古代には、遺跡周辺においてソバ栽培が行われていた可能性がある。

近世の水田耕作土と考えられている SX1 の 1 層と 2 層では、イネ機動細胞珪酸体が多く産出し、イネ類破片を伴っている。イネ機動細胞珪酸体の産出量については、試料 1g 当り 5,000 個以上検出された地点の分布範囲と、実際の発掘調査で検出された水田址の分布がよく対応する結果が得られており〔藤原 1984〕、試料 1g 当り 5,000 個が水田土壌か否かを判断する目安とされている。SX1 の 1 層と 2 層から産出するイネ機動細胞珪酸体の産出量は水田土壌の目安を大幅に上回っており、プラント・オパール分析からも SX1 の 1 層と 2 層が水田耕作土である可能性が高いと言える。なお、SX1 の 2 層では 3 箇所分析試料（基本層序 CC'-3、4、6）が採取されているが、このうち、基本層序 CC'-4 と基本層序 CC'-6 ではイネ機動細胞珪酸体とイネ類破片の産出量が

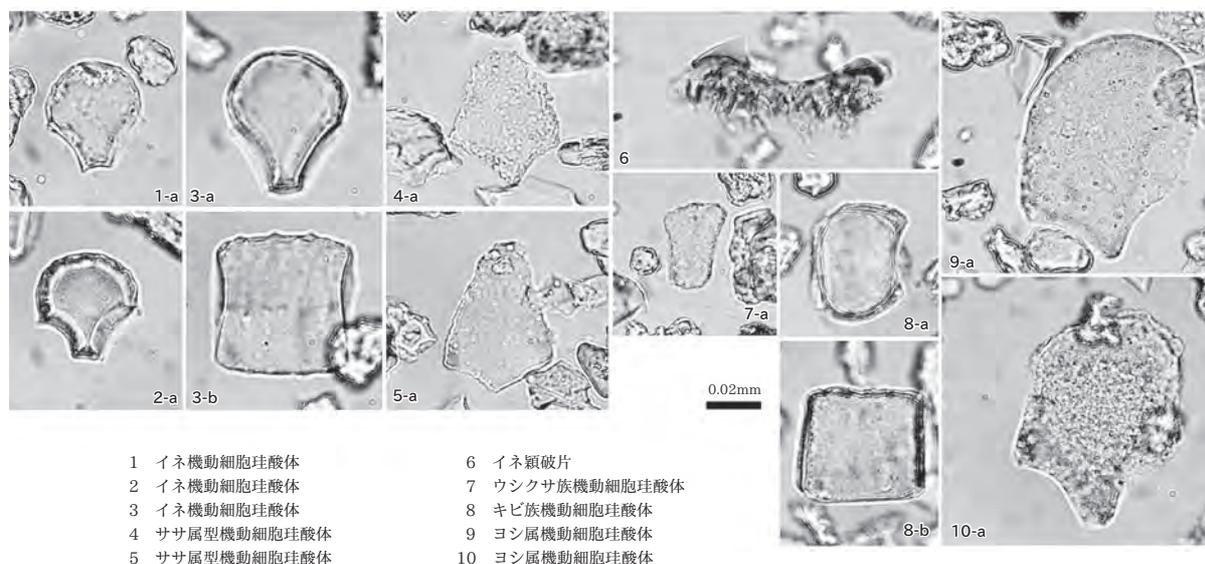
第1節 花粉分析とプラント・オパール分析



第11図 川根谷内遺跡における植物珪酸体分布図

第6表 試料1g当りのプラント・オパール個数

	イネ (個/g)	イネ類破片 (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	ササ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	ポイント型珪酸体 (個/g)	不明 (個/g)
基本層序CC'-1	57,200	22,400	1,200	16,200	0	7,500	13,700	5,000	6,200	0
基本層序CC'-2	86,200	41,100	4,100	8,200	1,400	10,900	9,600	1,400	10,900	2,700
基本層序CC'-3	45,200	17,800	0	9,600	0	8,200	13,700	6,800	2,700	0
基本層序CC'-4	14,000	3,800	5,100	7,600	0	2,500	6,300	1,300	1,300	1,300
基本層序CC'-5	0	0	0	5,400	0	0	1,400	0	0	0
基本層序CC'-6	11,000	0	0	2,800	0	11,000	4,100	4,100	1,400	0
基本層序BB'-1	34,400	17,200	2,500	17,200	0	11,100	17,200	7,400	4,900	6,100
基本層序BB'-2	2,500	0	1,200	6,200	0	1,200	0	1,200	0	1,200
基本層序BB'-3	0	0	0	0	2,500	2,500	0	0	0	0
基本層序BB'-4	0	0	0	6,900	0	1,400	2,800	0	0	1,400
基本層序BB'-5	0	0	1,200	2,500	0	0	1,200	0	0	0
基本層序BB'-6	0	0	1,400	11,000	0	2,800	2,800	2,800	0	0
畦畔5-1	33,600	14,600	1,100	12,300	0	16,800	5,600	12,300	3,400	0
畦畔5-2	0	1,300	1,300	2,600	0	2,600	2,600	3,900	0	1,300
畦畔5-3	33,700	24,100	1,200	9,600	2,400	26,500	28,900	2,400	3,600	4,800



- 1 イネ機動細胞珪酸体
- 2 イネ機動細胞珪酸体
- 3 イネ機動細胞珪酸体
- 4 ササ属型機動細胞珪酸体
- 5 ササ属型機動細胞珪酸体
- 6 イネ類破片
- 7 ウシクサ族機動細胞珪酸体
- 8 キビ族機動細胞珪酸体
- 9 ヨシ属機動細胞珪酸体
- 10 ヨシ属機動細胞珪酸体

第12図 基本層序 CC'-2 から産出した植物珪酸体

少なく、基本層序 CC'-3 では産出量が多い傾向があり、同一層準の中でも産出量がばらつく状況が捉えられた。基本層序 CC'-6 (SX1 の 2 層) の花粉分析の結果でも、イネ科の多産とともに、水田雑草を含む分類群であるサジオモダカ属やオモダカ属、キカシグサ属の産出が見られ、基本層序 CC'-6 (SX1 の 2 層) が水田であった可能性を支持する。さらに、基本層序 CC'-6 (SX1 の 2 層) ではキュウリ属の産出が確認できた。キュウリ属はキュウリやメロンなどの栽培植物が含まれる分類群であり、近世には遺跡周辺においてキュウリ属も栽培されていた可能性がある。また、樹木花粉ではハンノキ属やマツ属複雑管束亜属、スギ属などの産出が目立ち、遺跡周辺に広がっていた古植生は、古代以前と同じく、低地にはハンノキ林が、周辺の丘陵地などにはニヨウマツ林やスギ林が分布していたと考えられる。

近代の耕作土と考えられている IIa 層と IIb 層では、水田土壌の目安を上回るイネ機動細胞珪酸体が産出しており、イネ穎破片を伴う。ただし、同じ IIb 層でも、基本層序 BB'-2 (IIb 層) ではイネ機動細胞珪酸体の産出量が少なく、イネ穎破片の産出も見られないが、畦畔 5-3 (IIb 層) ではイネ機動細胞珪酸体とイネ穎破片が多く産出している。IIb 層堆積時は、畦畔 5 周辺にはイネが多く分布しており、基本層序 BB' の試料採取地点の周辺にはイネの分布が少なかったなど、場所によってイネの分布状況が異なっていた可能性がある。畦畔 5-1 (IIa 層) と畦畔 5-3 (IIb 層) における花粉分析の結果では、下位層と同じくハンノキ属やマツ属複雑管束亜属、スギ属などの産出が目立つが、ハンノキ属の産出率がやや減少している。この時期に稲作が行われていた可能性と併せて考えると、低湿地林を形成していたハンノキ属が伐採され、そこを水田として利用していた状況が推測される。

2) 笹木遺跡との比較

川根谷内遺跡のすぐ北に位置する笹木遺跡では、花粉分析とプラント・オパール分析が行われている〔龍田ほか 2018〕。ここでは、両遺跡の分析結果を比較し、共通点や相違点から遺跡周辺の古環境を類推する。

川根谷内遺跡では古代から近世、近代の試料において、スギ属やハンノキ属の産出が目立つという特徴がみられた。この特徴は、笹木遺跡においても確認され、両遺跡に共通する特徴である。よって、古代から近代にかけて両遺跡周辺にはスギ林やハンノキ林が存在していた可能性がある。一方で、コナラ属コナラ亜属とマツ属複雑管束亜属の産出傾向は両遺跡で異なる。川根谷内遺跡では古代の試料においてマツ属複雑管束亜属の産出が目立つが、笹木遺跡ではマツ属複雑管束亜属はそれほど産出していない。逆に、笹木遺跡では古代の試料においてコナラ属コナラ亜属の産出が多いが、川根谷内遺跡ではコナラ属コナラ亜属はそれほど産出していない。古代において、川根谷内遺跡周辺にはマツ属複雑管束亜属が、笹木遺跡周辺にはコナラ属コナラ亜属が分布していた可能性がある。

また、上記したように川根谷内遺跡のプラント・オパール分析の結果によると、水田稲作が行われていた可能性が確認できるのは近世の堆積層であり、笹木遺跡でも近世の試料から多くのイネ機動細胞珪酸体が得られている。ただし、川根谷内遺跡では古代の III 層以下の層準からイネ機動細胞珪酸体が産出していないが、笹木遺跡の花分析結果では、古代の層準において水田の存在が示唆されている。さらに、イネ以外の栽培植物の存在も確認されており、川根谷内遺跡の花分析結果では、古代においてソバやアブラナ科が、近世にはキュウリ属の栽培が行われていた可能性が示された。笹木遺跡でもソバやアブラナ科の栽培が推測されているが、川根谷内遺跡とは時期が異なり、近世とされている。

第Ⅶ章 総 括

第 1 節 川根谷内遺跡の性格

本調査では、近世以降と考えられる耕作関連遺構の畦畔 4 条・水田跡 1 基、性格不明遺構 1 基が検出され、春日編年Ⅴ～Ⅵ期（9 世紀代）を主体とする平安時代の遺物、近世以降の陶磁器が出土した。周辺では上郷 A 遺跡〔上野・春日 1997〕、牛道遺跡〔立木（土橋）ほか 1999〕、川根谷内墓所遺跡〔江口 2001〕など、同一旧河道の自然堤防上に立地する 9 世紀代の遺跡が調査されており、集落域のほか、水田跡などの生産域も確認されている。旧河道対岸の自然堤防上に立地し、近年調査された笹木遺跡は、古代では生産域として利用された可能性が高く、旧河道をつうじた水上交通による他遺跡との交流を行っていたことが推定されている〔龍田ほか 2018〕。本調査で確認された SX1 は位置的にみて、この旧河道の落ち際の可能性がある。この旧河道は、上記のとおり、兩岸の自然堤防上に立地する遺跡の年代から、平安時代には存在していたことが推定できる。一方、埋没年代について詳細を判別できる資料はない。しかし、寛永 16 年（1639）の『横越島絵図』には、この河川は描かれていないため、埋没年代は江戸時代以前と推測できる。

本遺跡の古代における土地利用を推測すると、笹木遺跡と同様の土地利用・水上交通による交流を行っていた可能性は高いと考えられる。また笹木遺跡の花粉分析とプラント・オパール分析では古代の層位で水田の可能性が指摘されているが、川根谷内遺跡では確認されていない。近世では両遺跡とも水田耕作の可能性が指摘されており、似通った土地利用がなされていたと推測される。また両遺跡の遺構確認面の標高を比較すると、川根谷内遺跡の標高は約 2.0m、笹木遺跡は標高約 2.5m で、比高差約 0.5m ほどである。両遺跡とも近世以降の土地改変により遺構確認面が削平されている部分が多いが、現存する遺構確認面を比較すると、笹木遺跡のほうが標高が高く、より安定した場所であったことがうかがえる。

また、笹木遺跡では深掘りトレンチ（標高約 1.2m）から、4 世紀後半（古墳時代中期前半）のコナラの立ち木が出土しており、地盤沈下速度が 1 年約 2.4mm、4 年約 1cm と報告されている。本調査でも同様の標高より深く基本層序 BB'・CC' で掘削を行ったが、樹木は出土しなかった。これは笹木遺跡の立地する自然堤防が、古代と同様、古墳時代においても、川根谷内遺跡の自然堤防より標高が高かったため、立ち木の検出に至った可能性があると考えられる。地盤沈下速度の違い、土地改変以前の標高の違いなど、考慮しなければならない点もあるが、川根谷内遺跡でもさらに深い土中に古墳時代の立ち木が存在する可能性もある。

本調査において、古代と判断できる包含層・遺構が確認されなかった理由は、近世以降の土地改変により、本来存在した包含層・遺構が削平されたためと推測される。しかしながら、地形の改変が行われ遺物が散布しているにせよ、平安時代の遺物出土量は全体としては少量であったことから、本調査地は遺跡の縁辺部である可能性が高い。また、旧土地利用をみると、本調査の調査地より東側の自然堤防は幅も広くより安定していると考えられる（図版 4）。これらのことから、遺跡主体部はより安定した地形の調査地東側、つまり遺跡範囲中心付近と推測できる。川根谷内遺跡の出現については、9 世紀中頃から遺跡数が爆発的に増加し、低湿地への進出が著しいことが知られており、その一例ととらえることができる。そして近世以降に、大規模に耕作地として整備された結果、調査地で確認された状況となったと考えられる。

引用・参考文献

- ア 赤羽正春・高橋知之 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第62集 上郷遺跡Ⅰ 横雲バイパス関係発掘調査報告書』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 朝岡政康・諫山えりか 2003 『東国遺跡 卸売市場建設に伴う市道東8-273 建設事業用地内発掘調査報告書』新潟市教育委員会
- 朝岡政康ほか 2010 『三王山遺跡Ⅱ 第4・7次調査 -新潟市立亀田中学校校舎・体育館改築工事に伴う三王山遺跡第2・4次発掘調査報告書-』新潟市教育委員会
- 家田順一郎 1987 『小丸山遺跡 小丸山遺跡緊急発掘調査報告書』横越村教育委員会
- 今井さやかほか 2007 『日水遺跡 第3次調査 -鍋田土地区画整理事業に伴う日水遺跡発掘調査報告書-』新潟市教育委員会
- 上野一久・春日真実 1997 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第87集 上郷遺跡Ⅱ 国道49号横雲バイパス関係発掘調査報告書』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 潮田憲幸 2014 『細池寺道上遺跡Ⅱ -第25次調査 県営ほ場整備事業(担い手育成型)両新地区に伴う第11次発掘調査報告書-』新潟市教育委員会
- 江口友子 2001 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第102集 川根谷内墓所遺跡 国道49号横雲バイパス関係発掘調査報告書Ⅳ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 大熊 孝 1996 「越後平野の治水と河川開発史」『第四紀研究』35(3) 日本第四紀学会
- 大家 健 2003 「中世 第三章 第二節「永禄六年北国下りの遺足」にみる中世の旅」『横越町史』通史編 横越町史編さん室・横越町
- 大矢雅彦・加藤泰彦 1984 『阿賀野川水害地形分類図・同説明書』建設省北陸地方建設局・阿賀野川工事事務所
- 恩古談話会 1982 『温古之栞』第32編
- カ 春日真実 1997a 「越後・佐渡における9世紀中葉の画期」『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会
- 春日真実 1997b 「越後・佐渡における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第7号 北陸古代土器研究会
- 春日真実 1999 「第4章 古代 第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』高志書院
- 春日真実 2000 「考古編 第5章 まとめ」『吉田町史 資料編1 考古・古代・中世』吉田町
- 春日真実 2005 「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について -「今池編年」・「下西編年」・「山三賀編年」の検討を中心に-」『新潟考古』第16号 新潟県考古学会
- 鴨井幸彦・田中里志・安井 賢 2015 「暦年較正年代による新潟砂丘の形成年代の見直し」『第四紀研究』第54巻第3号
- 川上貞雄 1993 『横越村文化財調査報告② 山ん家遺跡 緊急発掘調査報告書』横越村教育委員会
- 川上貞雄 1996 『亀田町文化財調査報告書 第4集 荒木前遺跡 第2次調査』亀田町教育委員会
- 川上貞雄 1982 『亀田町文化財調査報告書2 中の山遺跡』亀田町教育委員会
- 神田勝郎 1997 『「中世」横越の風景 -阿賀の舟旅をよむ-』私家版
- 神田勝郎 2012 『横越の地名を歩く -岐阜県から山形まで-』横越コミュニティ協議会
- 小池邦明・本間桂吉 1995 『新潟市小丸山遺跡 直り山団地建設事業用地内発掘調査報告書』新潟市教育委員会
- 小林巖雄 1994 「Ⅰ 巻町周辺の地形・地質」『巻町史 資料編1 考古』巻町
- 小林 存 1952 『横越村誌』横越公民館
- 後藤一雄 2003 「近世 第一章 第三節 沢海藩の成立と村々」『横越町史』通史編 横越町史編さん室・横越町
- 小山正忠・竹原秀雄 1967 『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社
- サ 酒井和男 1980 『三王山遺跡発掘調査報告書』亀田町教育委員会
- 酒井和男 2000 「第一章 横越町の遺跡概観」「第二章 考古資料」『横越町史』資料編 横越町史編さん室・横越町
- 坂井秀弥ほか 1989 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第53集 新新バイパス関係発掘調査報告書 山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 笹澤(諫山)えりか 2009 『中田遺跡 第2次調査 -市道荻川新津線道路改良事業に伴う中田遺跡第2次発掘調査報告書-』新潟市教育委員会
- 佐藤甲二 1999 「水田跡に関する擬似畦畔Bと連続耕作 -仙台市富沢遺跡の実例から-」『人類学集報1999 東京都立大学考古学報告4』東京都立大学
- 曾我廣見 1984 『横越村地名考』横越村
- タ 龍田優子ほか 2015 『下新田遺跡 第6・8・9次調査 -県営ほ場整備事業(経営体育成基盤整備型)道上地区に伴う第3・

- 5・6次発掘調査報告書』新潟市教育委員会
- 龍田優子ほか 2018 『筑木遺跡 第3次調査 -主要地方道新潟中央環状線道路整備事業に伴う筑木遺跡第3次発掘調査報告書-』新潟市教育委員会
- 田中久夫・長谷川正・木村澄枝・岡本郁栄・坂井陽一 1996 「新潟砂丘の形成史」『第四紀研究』第35第3巻 日本第四紀学会
- 立木(土橋)由理子ほか 1999 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第91集 牛道遺跡 国道49号横雲バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 立木宏明ほか 2015 『細池寺道上遺跡Ⅴ 第32次・38・41次調査 西江浦遺跡 第6次調査 -県営ほ場整備事業(担い手育成型)両新地区に伴う細池寺道上第15・17・18次 西江浦遺跡第4次調査報告書 第11次発掘調査報告書-』新潟市教育委員会
- 立木宏明ほか 2017 『細池寺道上遺跡Ⅵ 第44次調査 -県営ほ場整備事業(担い手育成型)両新地区に伴う細池寺道上遺跡第19次発掘調査報告書-』新潟市教育委員会
- 土橋由里子ほか 2007 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第177集 一般国道49号線亀田バイパス関係発掘調査報告書Ⅰ 城所道下遺跡・武左衛門裏遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 土橋由里子ほか 2009 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第200集 一般国道49号線亀田バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ 西郷遺跡・大蔵遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- ナ 中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の14C年代』日本先史時代の14C年代編集委員会編 日本第四紀学会 日本第四紀学会
- 新潟県農地部 1986 『新潟県土地改良史』新潟県農地部・新潟日報社
- 新潟古砂丘グループ 1974 「新潟砂丘と人類遺跡 -新潟砂丘の形成史Ⅰ」『第四紀研究』第13巻第2号 日本第四紀学会
- 新潟市合併町村史編集室 1986 『新潟市合併町村の歴史 第4巻 中蒲原郡から合併した町村の歴史(下) -鳥屋野・石山・曾野木・両川・大江山-』新潟市合併町村史編集室
- 新潟市 2007 『新 新潟歴史双書2 新潟市の遺跡』新潟市
- 新潟市 2011 『新 新潟歴史双書6 新潟砂丘』新潟市
- 新潟市文化財センター 2015 『新潟市文化財センター年報 第2号』新潟市文化財センター
- 平井信二 1996 『木の大自然』朝倉書店
- ハ 廣野耕造 1997 『笹山前遺跡・神明社裏遺跡・城山遺跡 県営圃場整備事業(先進技術導入モデル事業 亀田郷地区)に伴う平成7年度・平成8年度発掘調査報告書』新潟市教育委員会
- 藤田健太・久保安夫監修 1985 『藤田健太翁自伝』藤田健太
- 藤原宏志 1984 「プラント・オパール分析法とその応用 -先史時代の水田址調査-」『考古学ジャーナル』北隆館
- 文化庁文化財部記念物課 2010 「第Ⅵ章 遺構の記録」『発掘調査のてびき -集落遺跡発掘編-』文化庁文化財部記念物課
- マ 前山精明・相田泰臣 2004 『御井戸遺跡Ⅱ -2003年度確認調査の概要-』巻町教育委員会
- 前山精明・伊比博和ほか 2010 『大沢谷内北遺跡 第3次調査 - (仮称)国道403号小須戸上バイパス整備工事に伴う大沢谷内北遺跡第3次発掘調査報告書-』新潟市教育委員会
- 前山精明ほか 2012 『大沢谷内遺跡Ⅲ 第18次調査 -市道鎌倉横川線改良工事に伴う大沢谷内遺跡第2次発掘調査報告書-』新潟市教育委員会
- 前山精明ほか 2015 『峰岡上町遺跡第3次調査 -国道460号線改良工事に伴う峰岡上町遺跡第3次発掘調査報告書-』新潟市教育委員会
- 南 憲一 2002 『新潟市域災害年表』新潟大学積雪地域災害研究センター
- 南 憲一 2003 「近世 第一章 第一節 新発田領の成立と村々」『横越町史』通史編 横越町史編さん室・横越町
- 南 憲一 2003 「近世 第三章 第三節 第一項 街道と継所」『横越町史』通史編 横越町史編さん室・横越町
- ワ 渡邊朋和ほか 1997 『金津丘陵製鉄遺跡群発掘調査報告書Ⅱ 居村遺跡E・A・C地点、大入遺跡A地点』新津市教育委員会
- 渡辺ますみ 1991 『亀田町文化財調査報告書 第3集 荒木前遺跡』亀田町教育委員会
- 渡辺ますみほか 1994 『緒立C遺跡発掘調査報告書』黒埼町教育委員会
- 渡辺ますみほか 2009 『駒首潟遺跡 第3・4次調査 -大型小売店舗建設に伴う駒首潟遺跡第3・4次発掘調査報告書-』新潟市教育委員会
- 和田右苗 2003 「近世 第二章 第三節 治水と開発の進展」『横越町史』通史編 横越町史編さん室・横越町

別表1 遺構計測表

- 凡 例 1. 遺構名 記載順は、畦畔→水田→SXとし、さらにその種別ごとに番号順とした。
 2. 時代 遺構の帰属する時代は大きな区分によった。各遺構の詳細な時期については本文中に示した。
 3. 主軸方向 畦畔・水田等、必要と思われるもののみ計測した。
 4. 平面形・規模 上端・下端について記載した。畦畔については、長軸が長くて、短軸が幅である。
 5. 断面形・深度 断面形はセクションライン上の形状を基本とした。深度は上端の最大標高と底面の最小標高の差である。
 6. その他 表中の()は推定、あるいは残存値である。

図版 No.	写真 図版 No.	遺構名	グリッド	時代	確認 面	主軸方向	規模 (m)					底面 座標 (m)	形態		分層	切り合 い関係	出土 遺物	備考
							上端		下端		高さ・ 深度		平面	断面				
							長軸	短軸	長軸	短軸								
8・9・14	7	畦畔5	23I22・23、24I1・2・3・6、24H10・14・15	近代	Ⅲ	N-50°-E	(8.30)	0.30	(8.50)	0.60	0.15	0.14	-	台形状	-	なし	幅上端0.30～0.45 幅下端0.60～0.80	
8・9・14	7	畦畔6	24H24・25、25H3・4・8	近代	Ⅲ	N-47°-E	(4.85)	0.05	(4.85)	0.20	0.05	1.99	-	台形状	-	なし	幅上端0.02～0.25 幅下端0.20～0.46	
8・9・14	7	畦畔7	24I21・22、25I1、25H5・9・10・12～14・16～18・21・22、25G25、26G5	近代	Ⅲ	N-50°-E	(18.60)	0.31	(18.60)	0.62	0.18	1.99	-	台形状	-	なし	幅上端0.31～0.49 幅下端0.62～0.85	
8・9・14	7	畦畔8	25H15・19・20・23・24、25I6・7・11、26H3	近代	Ⅲ	N-50°-E	(9.90)	0.16	(10.40)	0.46	0.12	1.92	-	台形状	-	なし	幅上端0.16～0.40 幅下端0.46～0.62	
8・9・14	3・4	水田9	23H24・25、23I18・21～24、24H4・5・8～10・13～15・17～20・22～25、24I1～4・6～9・11～14・16・19・21～23、25H1～25、25G20・25、25I1・2・6・7・11・12・16・21、26G5・10、26H1～5・6・9		Ⅱb	N-50°-E	不明	不明	(28.60)	(8.80)	0.20	1.66	-	逆台形状	-	土師器 須恵器 陶磁器 黒色土器		
8・13・14	7	SX1	23H15・20・25、23I1・6・7・11～13・16～18・21～23		Ⅱa	不明	(5.56)	(5.02)	(5.10)	(4.40)	0.32	1.65	不整形	皿形	3	水田1を切る	土師器 須恵器 磁器	

別表2 土器観察表

- 凡 例 1. 出土位置 遺構名・グリッド名を記した。
 2. 法 量 口径・底径・器高を指す。括弧付の数値は遺存率の低いものである。
 3. 胎 土 胎土内に含まれる鉱物・小礫等について記した。「石」は石英粒、「長」は長石粒、「雲」は雲母、「チ」はチャート、「焼」は焼土粒、「角」は角閃石、「白」は白色粒子、「黒」は黒色粒子を表す。
 4. 色 調 土器の色調について記した。『新版標準土色帖』(小山・竹原1967)による。
 5. 焼 成 酸化炭焼成・還元炭焼成の区別を記した。
 6. 手 法 特徴的な手法のみを記し、網羅的な記載は行っていない。底部の「糸切り」・「ヘラ切り」はいずれも回転台を用いたものである。
 7. 遺 存 率 分数表示で遺存割合を示した。

試掘調査

図版 No.	報告 No.	出土位置 遺構 グリッド	層位	種別	器種	法 量 (cm)			胎土 含有物	色 調			焼成	手 法			遺存率		備 考	
						口径	底径	器高		外面	内面	焼成		外面	内面	底部	口縁	底部		
																				口縁
15	試掘1	4T	-	Ⅱa	須恵器	甕	-	-	(2.7)	石・長・チ	灰 N6/	灰 N6/	-	還元	ロクロナデ	あて具痕	-	-	-	外面9割凸凹状に欠損
15	試掘2	5T	-	Ⅱa	須恵器	甕	-	-	(5.2)	長・黒	灰 7.5Y6/1	灰 7.5Y6/1	自然釉	還元	格子状タタキ	同心円あて具痕	-	-	-	
15	試掘3	10T	-	Ⅱb	須恵器	甕	-	-	-	長・チ・白石凝灰石	灰白 7.5Y7/1	灰白 7.5Y7/1	-	還元	平行タタキ	平行タタキ	-	-	-	
15	試掘4	14T	-	Ⅱb	須恵器	甕	-	-	-	石・長・白石凝灰石・黒	暗灰 N3/	オリープ灰 2.5GY5/1	-	還元	平行タタキ	平行タタキ	-	-	-	

本発掘調査

図版 No.	報告 No.	出土位置 遺構 グリッド	層位	種別	器種	法 量 (cm)			胎土 含有物	色 調			焼成	手 法			遺存率		備 考
						口径	底径	器高		外面	内面	焼成		外面	内面	底部	口縁	底部	
15	1	24H10	Ⅱb	土師器	無台碗	-	5.0		長・焼	淡黄 2.5Y8/4	淡黄 2.5Y8/4	-	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切後ナデカ	-	7/36	
15	2	25H21	Ⅱb	土師器	無台碗	-	7.0	(1.1)	石・長・焼	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	-	酸化	-	-	-	-	7/36	全体的に摩耗している
15	3	25I11	Ⅱb	土師器	無台碗	-	8.0	(1.3)	長・雲・焼	灰白 5Y8/1	灰白 5Y8/1	-	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	-	3/36	全体的に摩耗している
15	4	25H3	Ⅱb	土師器	長甕	(23.0)	-	(2.6)	石・長・雲・チ	にぶい黄 2.5Y6/3	にぶい黄 2.5Y6/3	-	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	-	1/36	-	
15	5	25H21、25I16	Ⅱb	土師器	長甕	(25.0)	-	(4.0)	石・長・チ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	-	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	-	2/36	-	全体的に摩耗している
15	6	24H4	Ⅱb	土師器	鍋	(37.4)	-	(5.9)	石・長・チ	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	-	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	-	2/36	-	
15	7	25H3	Ⅱb	須恵器	杯蓋	-	-	(1.6)	石・長・角	灰白 N8/	灰白 N8/	-	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	-	小泊
15	8	23I11	Ⅱb	須恵器	杯蓋	-	-	(1.5)	石・長・チ	灰白 N7/	灰白 N7/	-	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	-	小泊
15	9	23I17	Ⅱb	須恵器	無台杯	(12.0)	-	(2.0)	長・角	灰 N5/	灰 N5/	-	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	-	3/36	-	
15	10	23I6	Ⅱa	須恵器	有台杯	-	7.0	(1.7)	長・白石凝灰石	灰 N6/	灰 N6/	-	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切後ナデ	-	5/36	小泊
15	11	25H23、26H6	Ⅱb	須恵器	有台杯	-	9.4	(3.0)	石・長・雲・角	灰 N6/	灰 N6/	-	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切後ナデ	-	11/36	小泊
15	12	25H3	Ⅱb	須恵器	有台杯	-	13.0	(2.6)	長・角	灰 5Y8/1	灰 5Y8/1	-	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	8/36	全体的に摩耗している。小泊か
15	13	23H25、24H4	Ⅱa	須恵器	長頸壺	5.0	-	(4.3)	長・チ	灰 N5/	灰 N5/	自然釉	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	-	8/36	-	小泊
写図 8	15	23I16	Ⅱa	磁器	瓶か	-	(2.5)	(1.9)	-	明緑灰 7.5GY7/1	明緑灰 7.5GY7/1	透明釉	-	施釉・施文	施釉	-	7/36	-	肥前
写図 8	16	24I1	Ⅱa	陶器	掃鉢	-	(16.0)	(5.4)	焼土・白	褐 7.5YR4/6	褐 7.5YR4/6	鉄釉	-	ロクロナデ後施釉	ロクロナデ後施釉、施釉	-	2/36	1/36	在地 近代か
写図 8	17	25G25	Ⅱb	陶器	鉢	-	10.0	(2.2)	白・砂	褐 7.5YR4/6	灰白 7.5Y8/2	白釉	-	ロクロナデ後白釉	ロクロナデ後白釉	-	3/36	5/36	在地 近代か

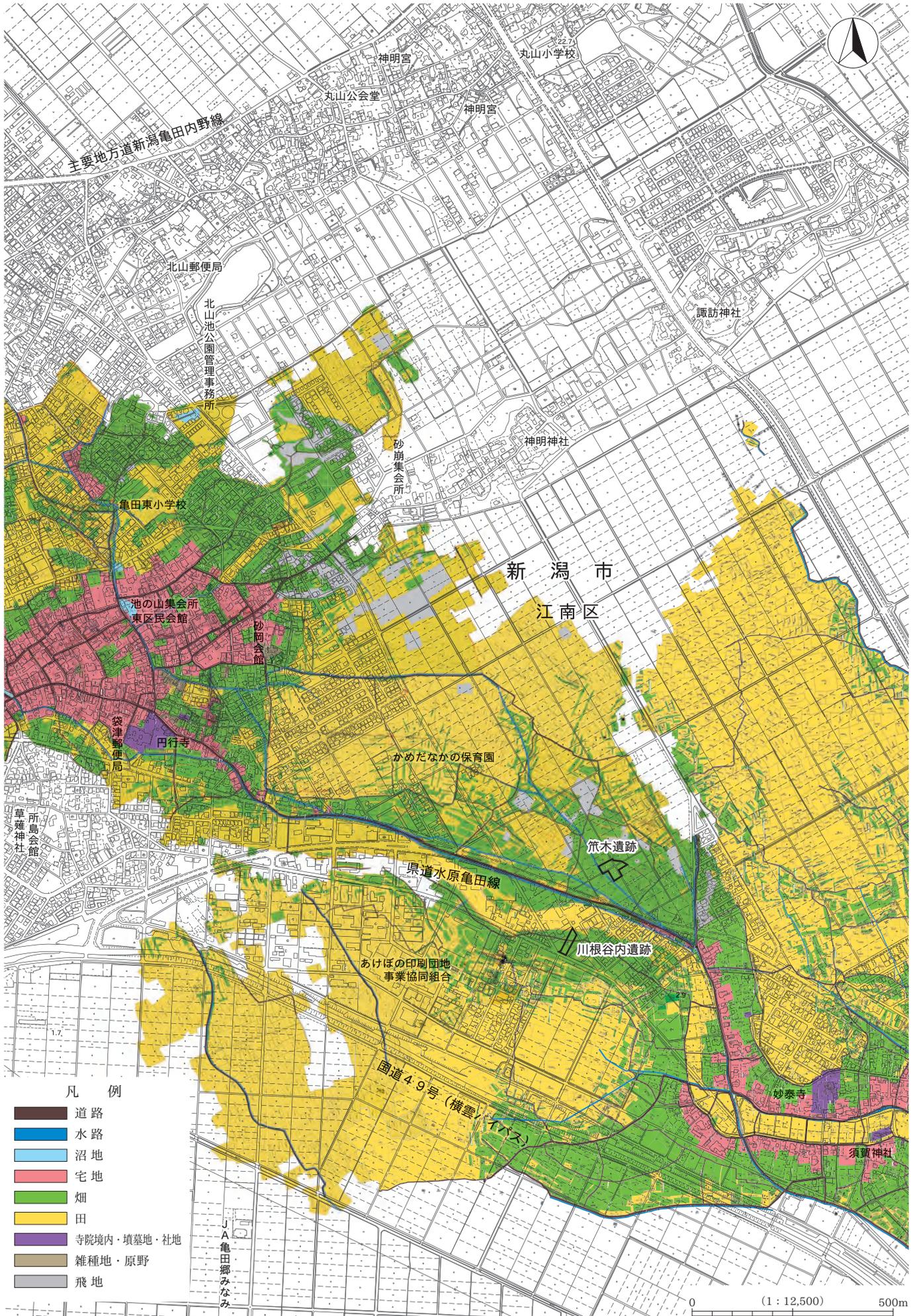
別表3 金属製品観察表

図版 No.	報告 No.	出土位置 遺構 グリッド	層位	器種	法 量 (cm)			重量 (g)	備考
					長さ	幅	厚さ		
15	14	23H20	Ⅱa	和釘	(3.0)	0.3	0.4	1.87	

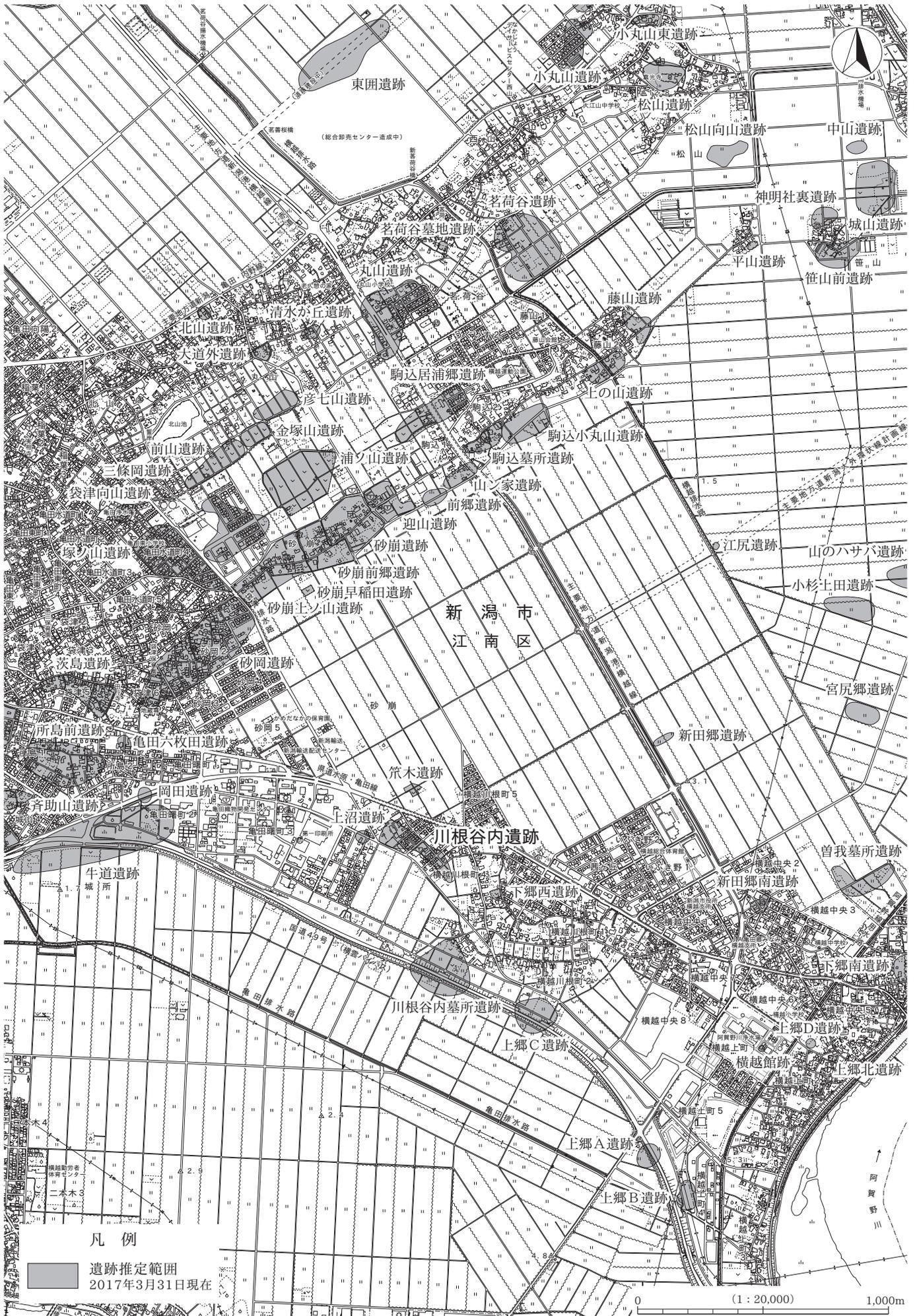
圖 版



0 (1 : 50,000) 2,000m
明治 44 年測図 大正 3 年発行 新潟・新津
1/50,000 大日本帝国陸地測量部



「新潟市地形図1：2,500」を縮小、明治24年更正図を着色・合成



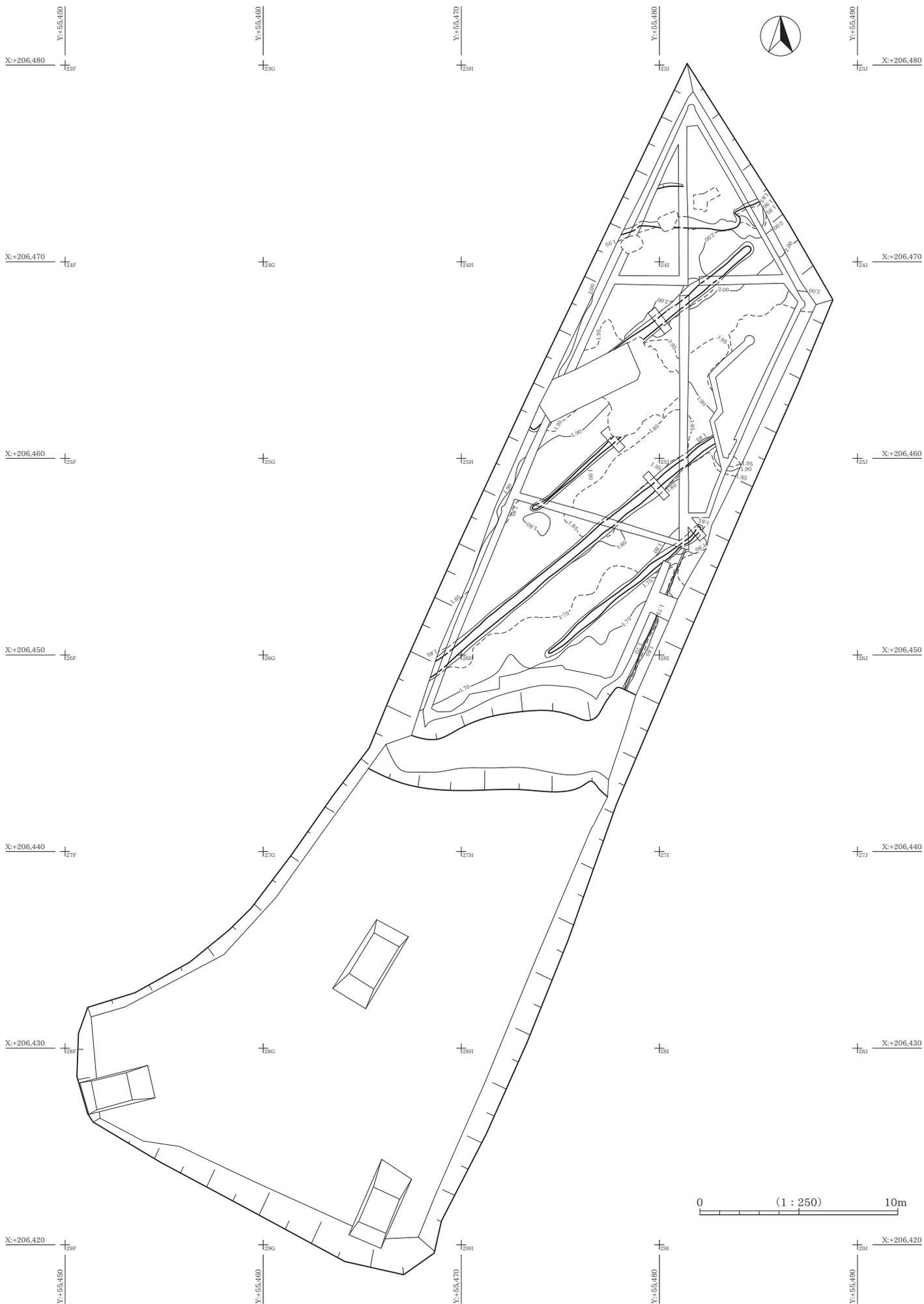
凡例

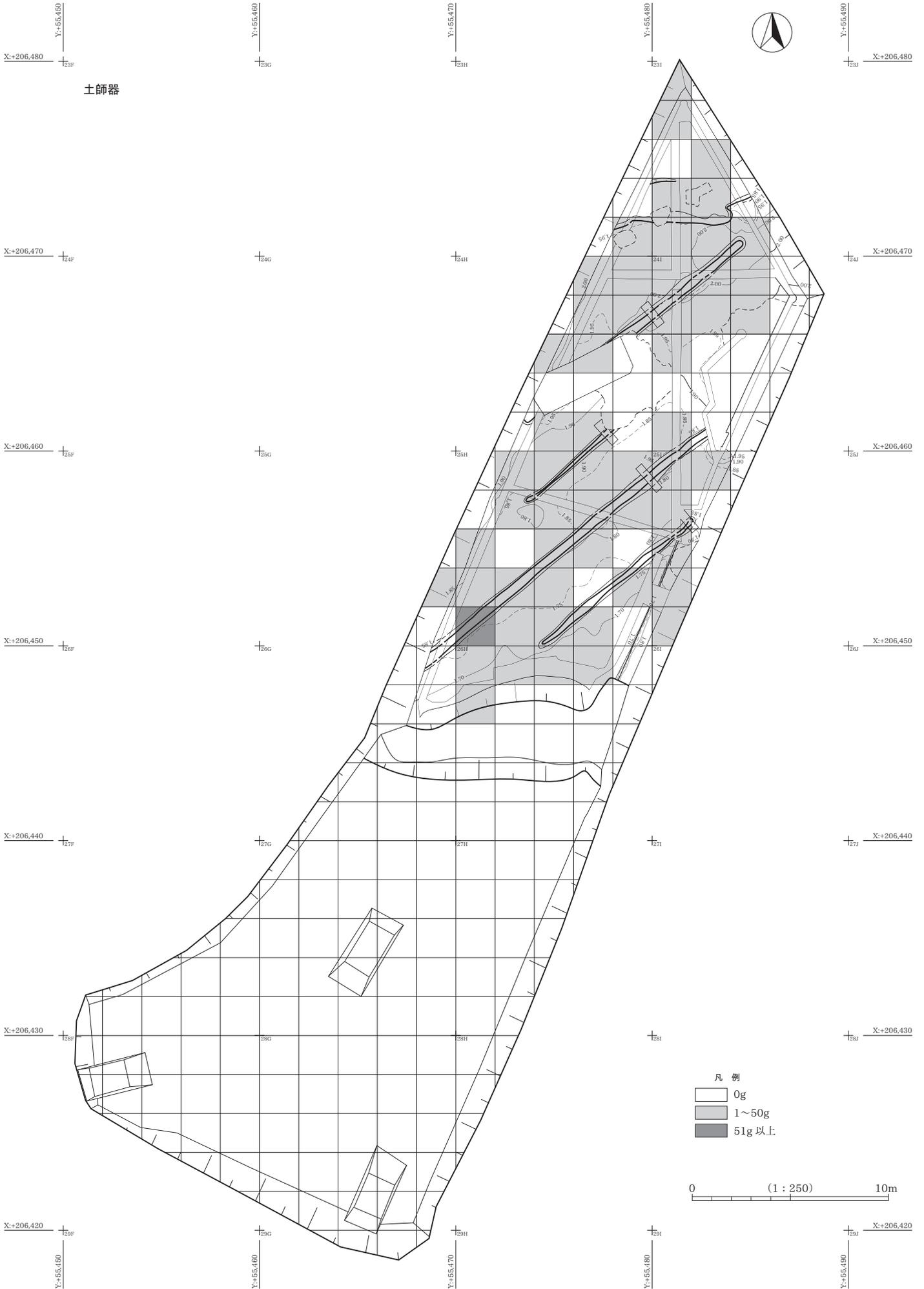
遺跡推定範囲
2017年3月31日現在

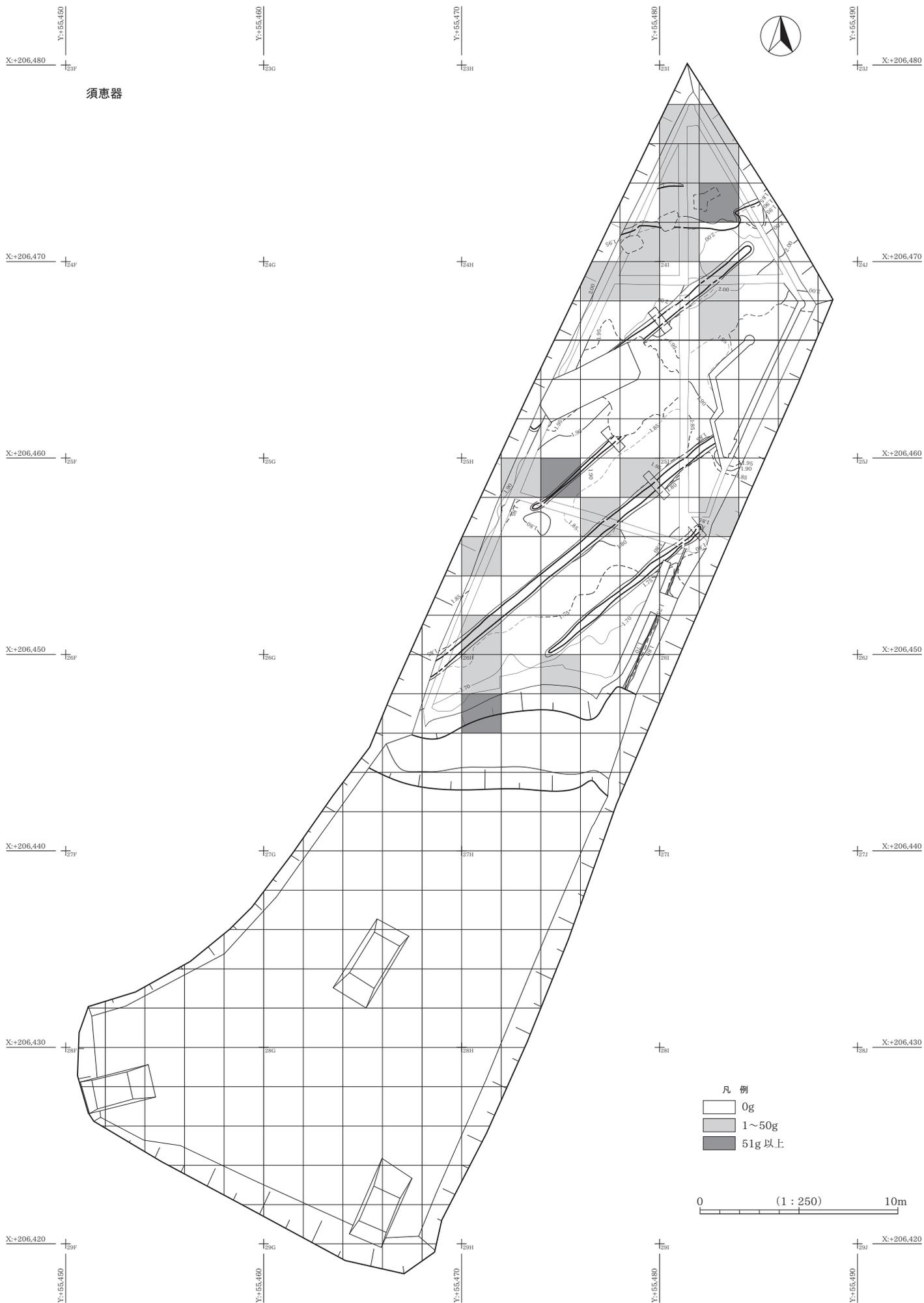
「新潟市地形図1:2,500」を加筆修正

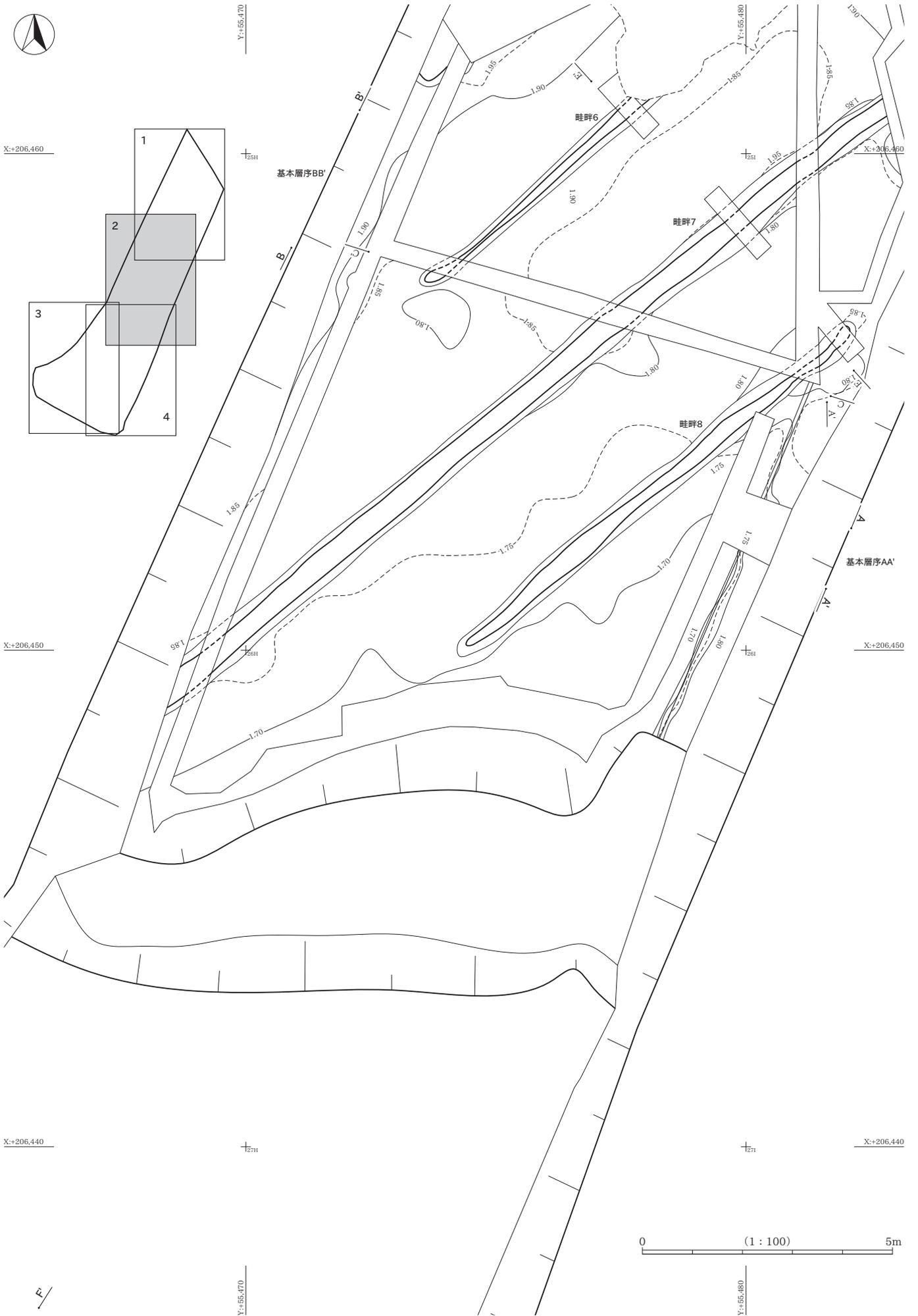


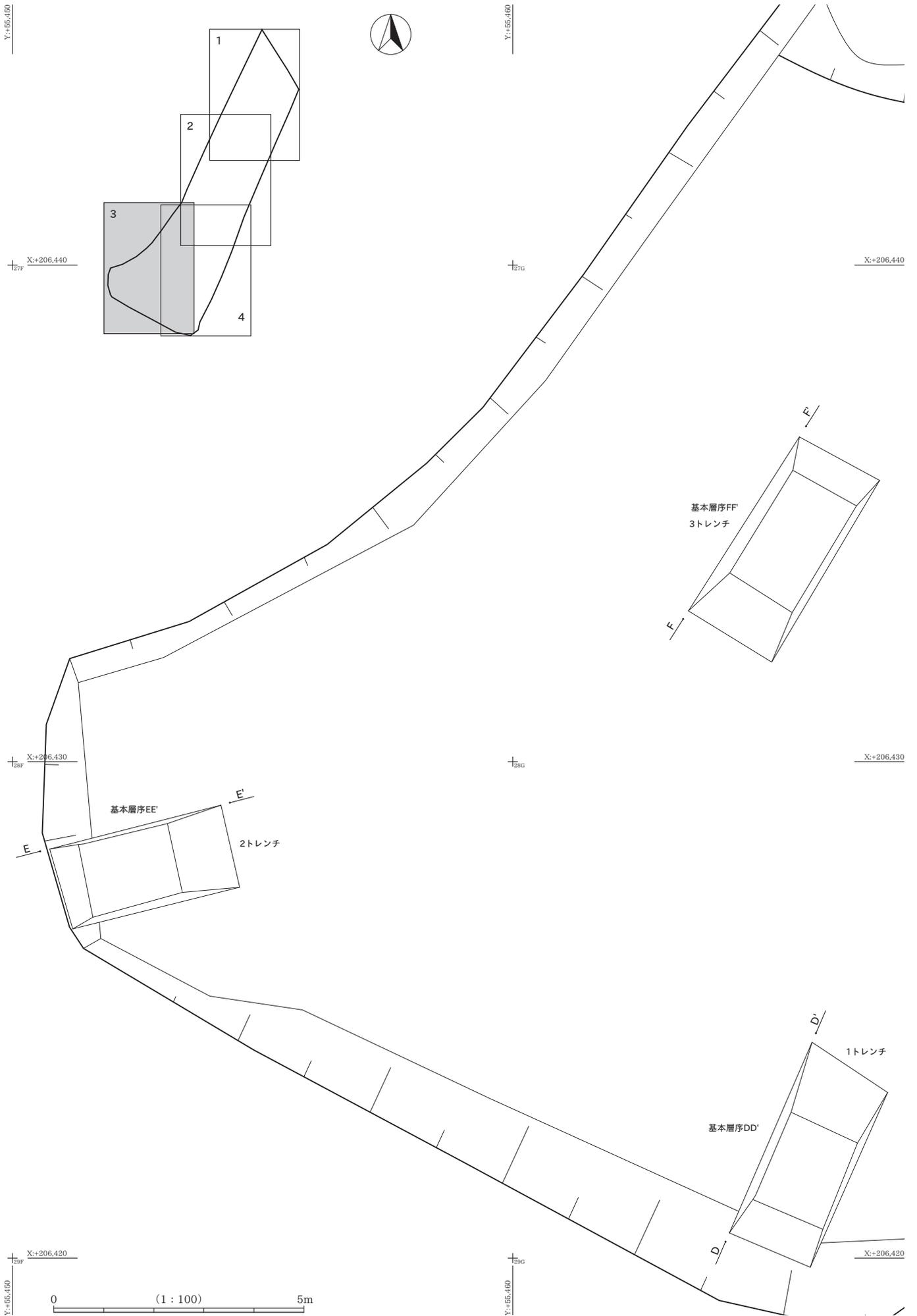
「平面直角座標値は世界測地系（測量成果2011）による。」
 「新潟市地形図 1：2,500」を加筆修正

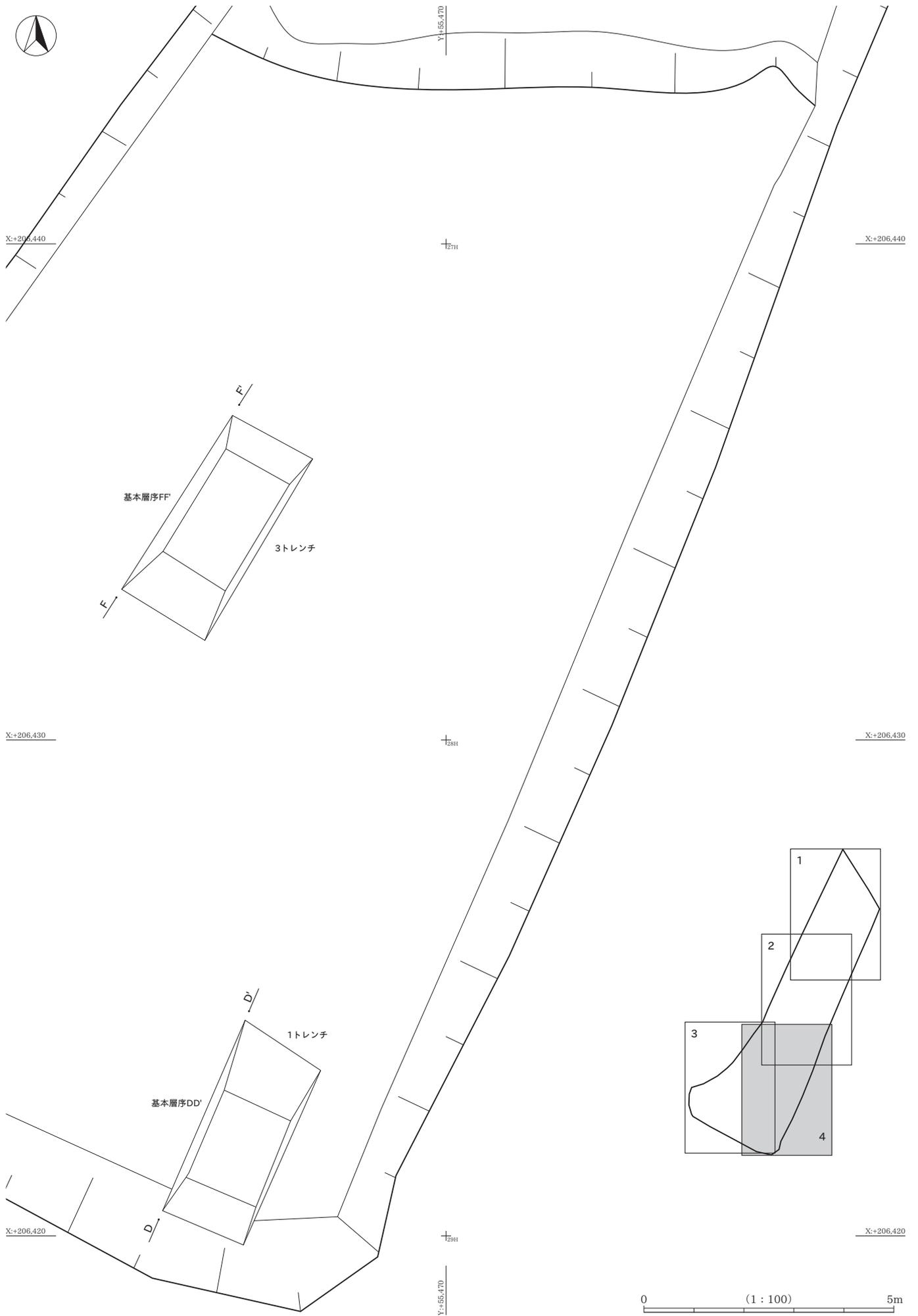


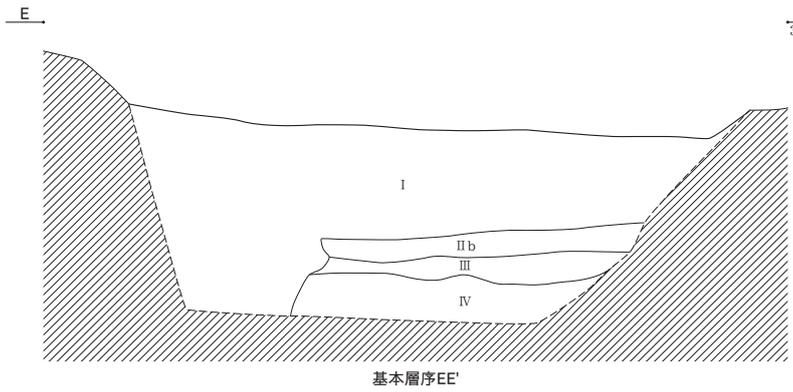
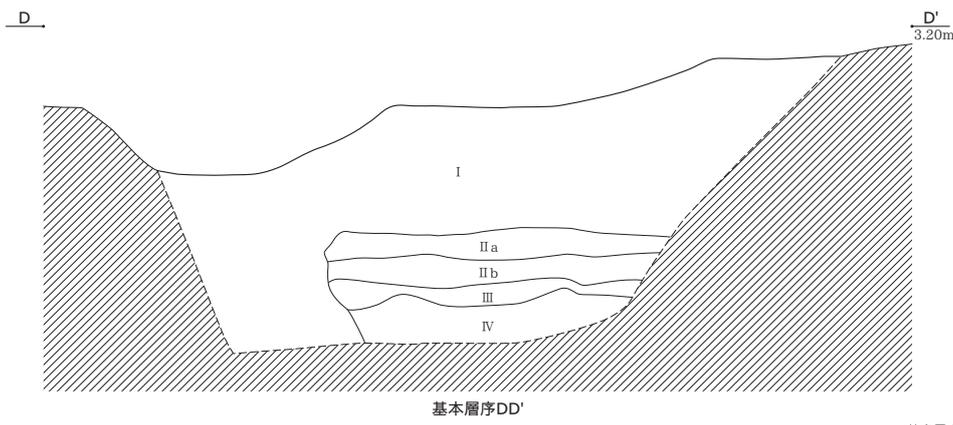
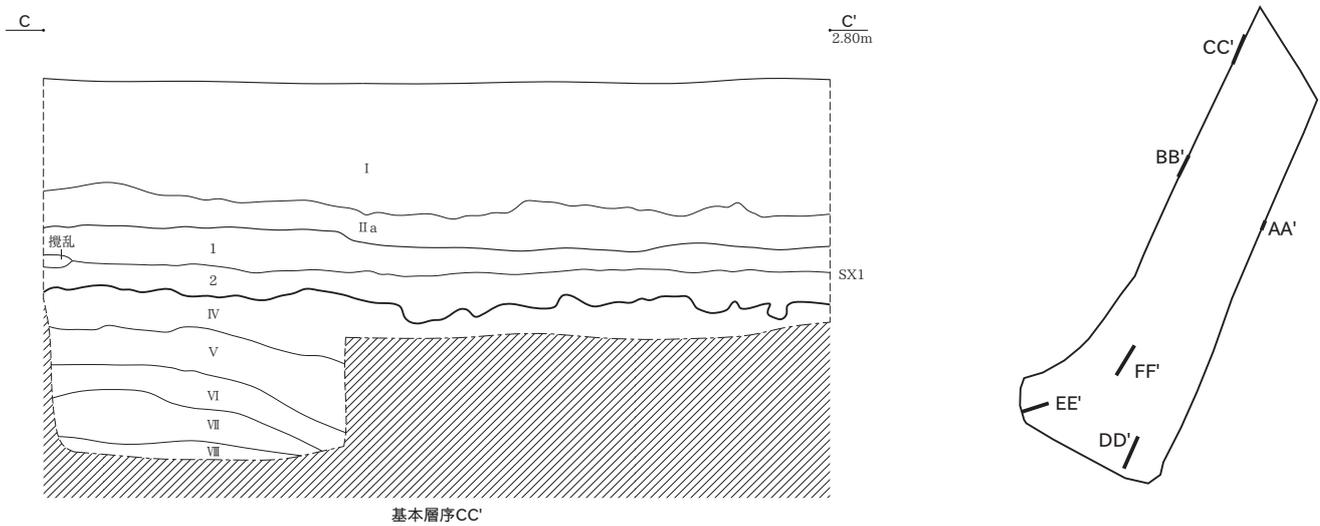
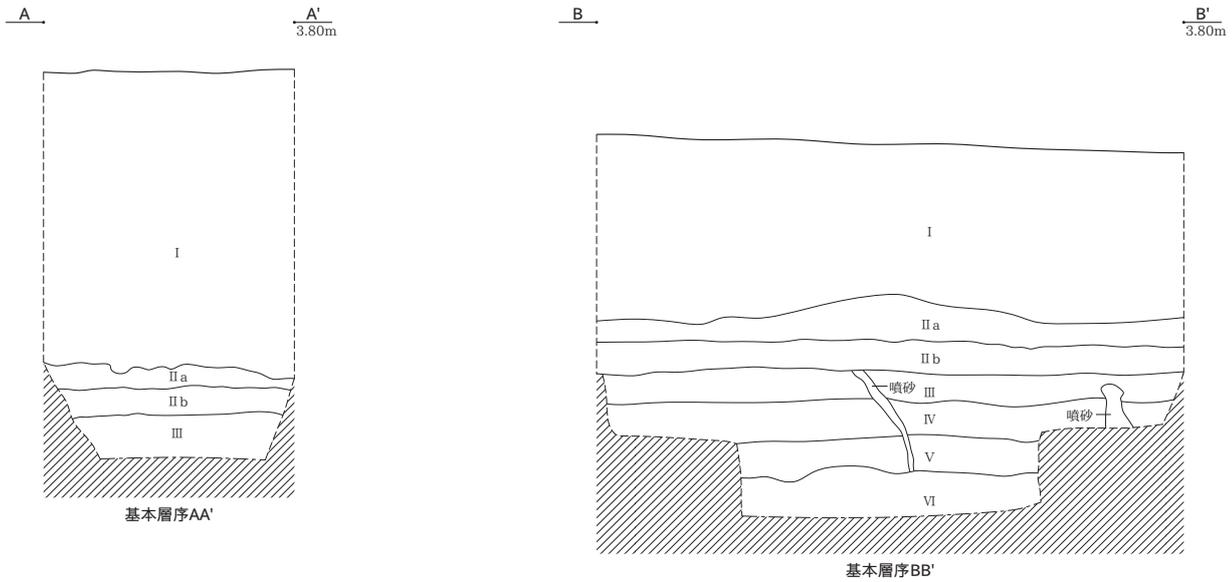






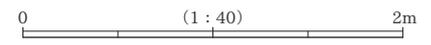


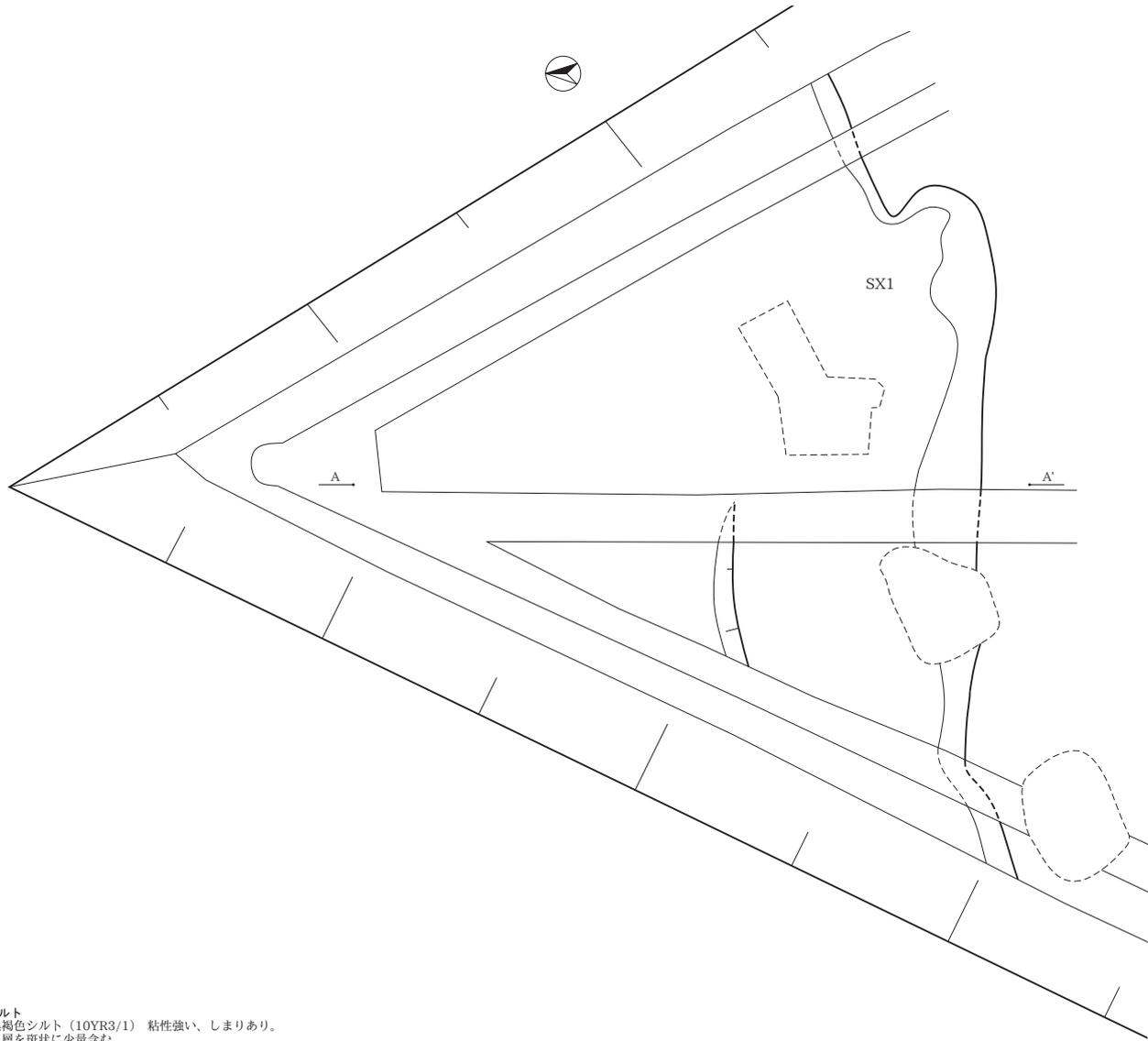
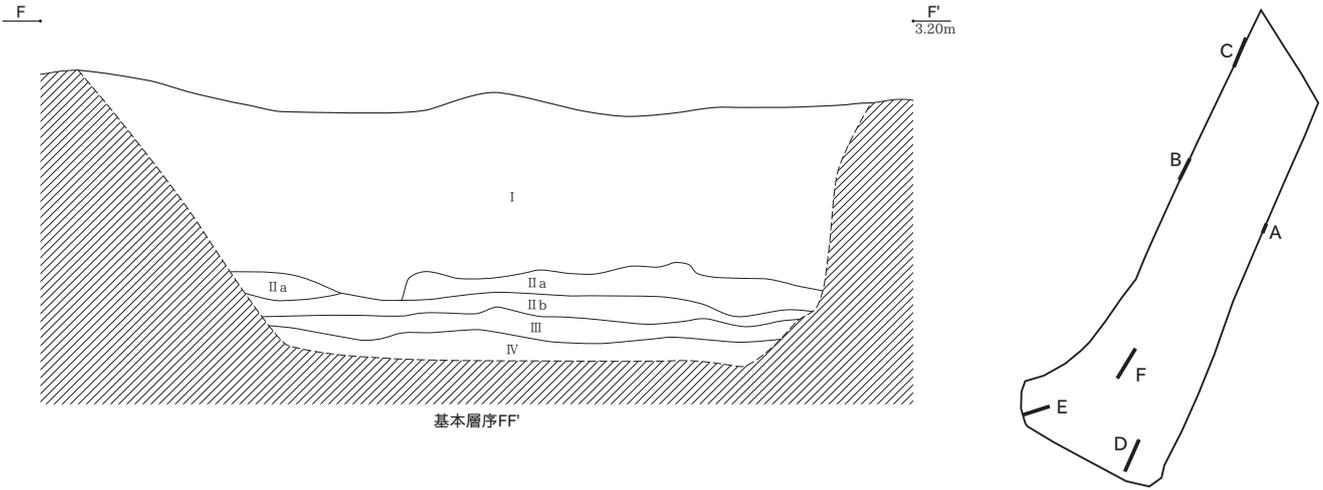




- 基本層序**
- I 表土、攪乱、盛土。
 - IIa 黒褐色シルト (10YR3/1) 粘性強い、しまりあり。III層を斑状に少量含む。
 - IIb 黒褐色シルト (2.5Y3/1) 粘性強い、しまりあり。III層を斑状に多量に含む。旧耕作土。
 - III 青灰色シルト、鉄分を斑状に含む。 (5BG6/1) 粘性あり、しまりあり。植物痕による黒褐色シルト、鉄分を斑状に含む。III~V層では噴砂脈が確認できる。
 - IV 青灰色~灰白色粘質シルト (10G7/1~10YR/8/2) 粘性強い、しまり弱い。鉄分を斑状に含む。
 - V 灰白色粘質シルト (10YR/8/2) 粘性強い、しまり弱い。鉄分を斑状に含む。
 - VI 灰白色砂質シルト (10YR/8/2) 粘性弱い、しまり弱い。
 - VII 緑灰色砂質シルト (10G6/1) 粘性弱い、しまりなし。
 - VIII 灰白色砂質シルトと粘質シルトの互層 (10YR/8/2)

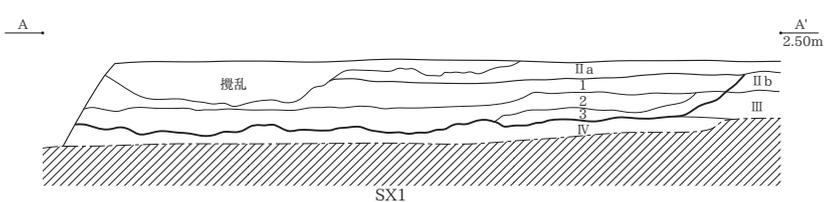
- SX1**
- 1 褐灰色シルト (10YR4/1) しまりあり、粘性ややあり。
 - 2 褐灰色シルト (10YR5/1) しまりあり、粘性あり下面は攪拌を受け乱れる。



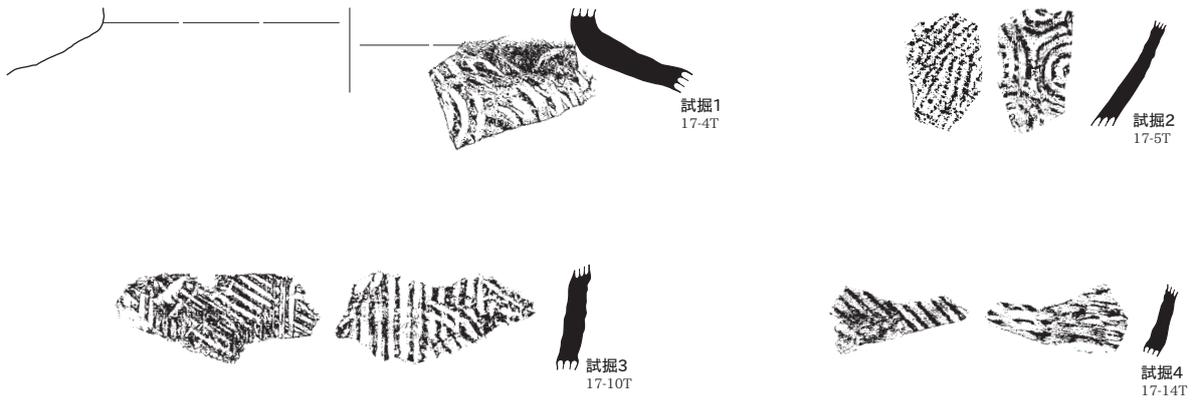


- 南北ベルト
- IIa 黒褐色シルト (10YR3/1) 粘性強い、しまりあり。III層を斑状に少量含む。
 - IIb 黒褐色シルト (2.5Y3/1) 粘性強い、しまりあり。III層を斑状に多量に含む。旧耕作土。
 - III 青灰色シルト (5BG6/1) 粘性あり、しまりあり。植物根による黒褐色シルト、鉄分を斑状に含む。III～V層では噴砂脈が確認できる。
 - IV 青灰色～灰白色粘質シルト (10G7/1～10YR/8/2) 粘性強い、しまり弱い。鉄分を斑状に含む。
 - V 灰白色粘質シルト (10YR/8/2) 粘性強い、しまり弱い。鉄分を斑状に含む。

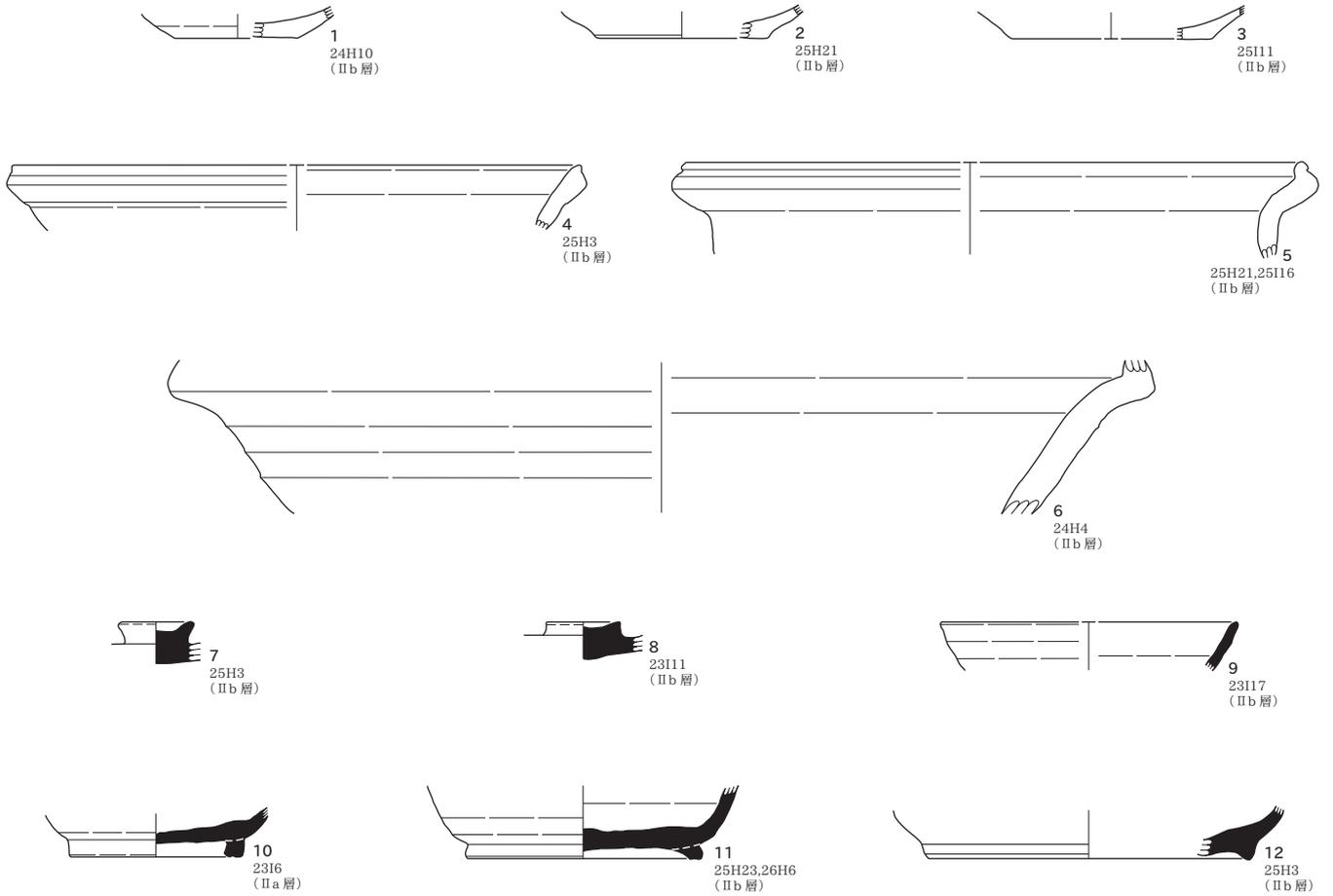
- SX1
- 1 褐灰色シルト (10YR4/1) しまりあり、粘性ややあり。
 - 2 褐灰色シルト (10YR5/1) しまりあり、粘性あり。下面は攪拌を受け乱れる。
 - 3 褐灰色シルト (10YR5/1) しまりあり、粘性あり。径2～5cmの黄褐色粘土 (10YR5/6) を塊状に少量含む。



試掘調査出土遺物 (試掘1~4)

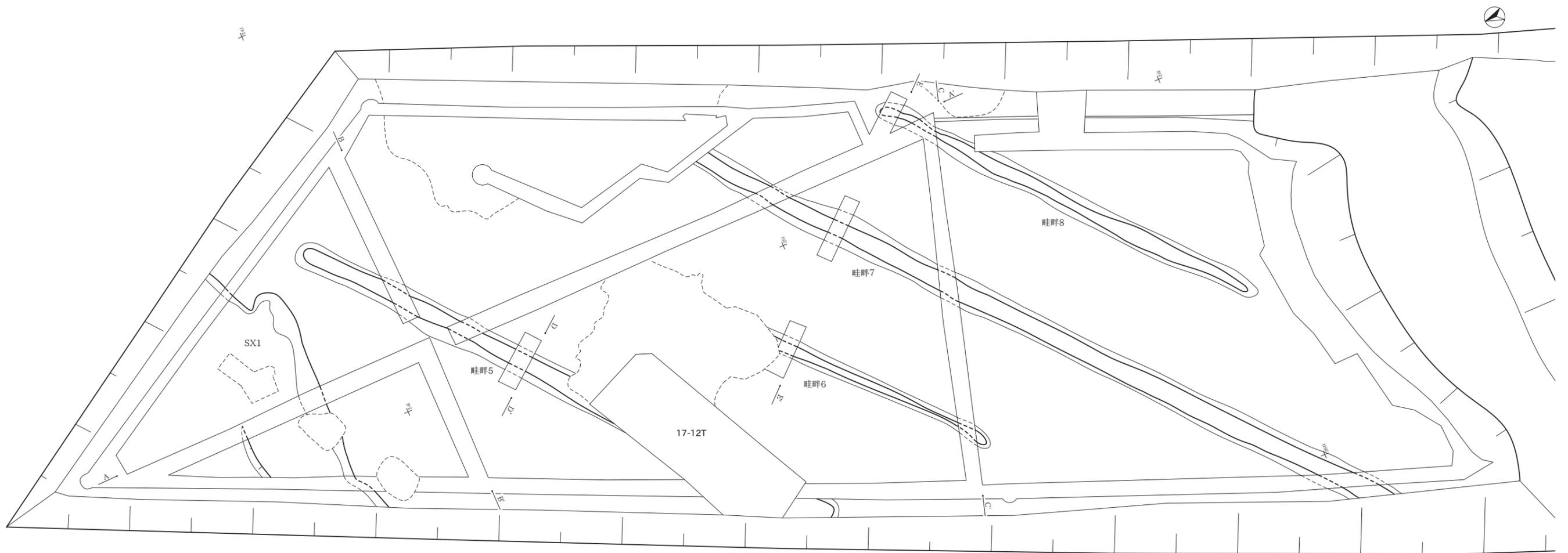


本発掘調査出土遺物 (1~13)

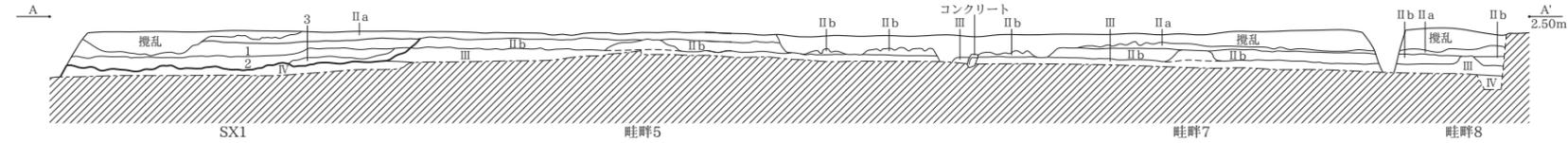


金属製品 (14)

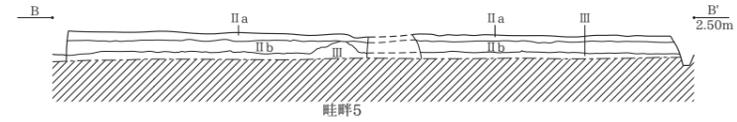




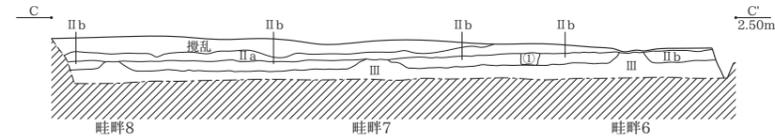
南北ベルト



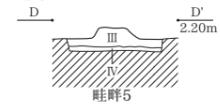
東西ベルト1



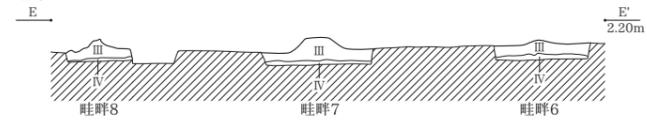
東西ベルト2



畦畔5



畦畔6・7・8



南北ベルト

- IIa 黒褐色シルト (10YR3/1) 粘性強い、しまりあり。III層を斑状に少量含む。
- IIb 黒褐色シルト (2.5Y3/1) 粘性強い、しまりあり。III層を斑状に多量に含む。旧耕作土。
- III 青灰色シルト (5BG6/1) 粘性あり、しまりあり。植物痕による黒褐色シルト、鉄分を斑状に含む。III~V層では噴砂脈が確認できる。
- IV 青灰色~灰白色粘質シルト (10G7/1~10YR/8/2) 粘性強い、しまり弱い。鉄分を斑状に含む。

SX1

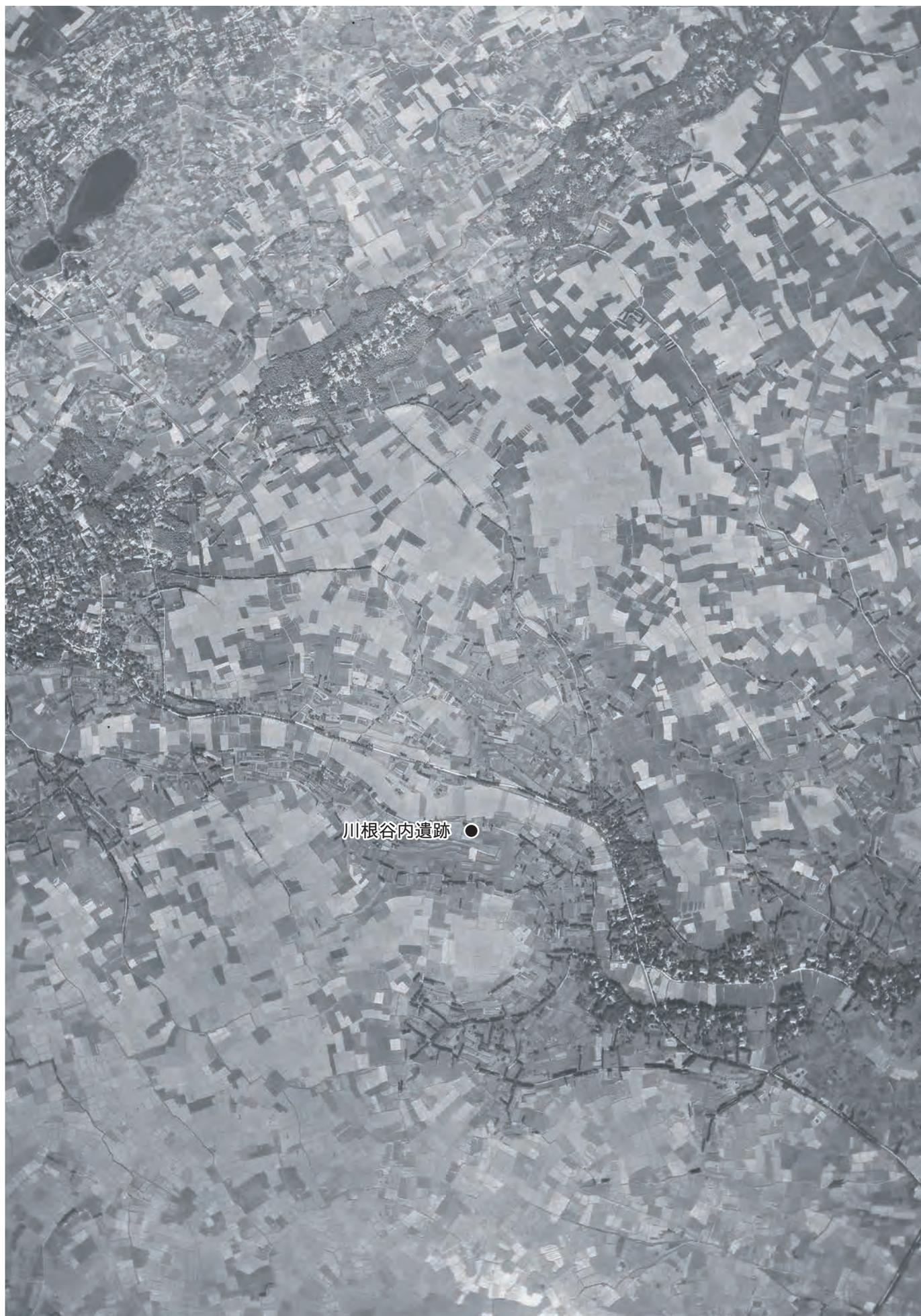
- 1 褐灰色シルト (10YR4/1) しまりあり、粘性ややあり。
- 2 褐灰色シルト (10YR5/1) しまりあり、粘性あり下面是攪拌を受け乱れる。
- 3 褐灰色シルト (10YR5/1) しまりあり、粘性あり。径2~5cmの黄褐色粘土 (10YR5/6) を塊状に少量含む。

東西ベルト1

- IIa 黒褐色シルト (10YR3/1) 粘性強い、しまりあり。III層を斑状に少量含む。
- IIb 黒褐色シルト (2.5Y3/1) 粘性強い、しまりあり。III層を斑状に多量に含む。旧耕作土。
- III 青灰色シルト (5BG6/1) 粘性あり、しまりあり。植物痕による黒褐色シルト、鉄分を斑状に含む。III~V層では噴砂脈が確認できる。

東西ベルト2

- IIa 黒褐色シルト (10YR3/1) 粘性強い、しまりあり。III層を斑状に少量含む。
- IIb 黒褐色シルト (2.5Y3/1) 粘性強い、しまりあり。III層を斑状に多量に含む。旧耕作土。
- III 青灰色シルト (5BG6/1) 粘性あり、しまりあり。植物痕による黒褐色シルト、鉄分を斑状に含む。III~V層では噴砂脈が確認できる。
- ① 黒褐色シルト (10YR2/2) しまりややあり、粘性あり。旧暗渠か。IIbよりもやや乱れる。



川根谷内遺跡周辺空中写真

米軍撮影 1948年



調査前現況 (南西→北東)



完掘状況全景 (南西→北東)



完掘状況全景（上が北西）



完掘状況全景（上が北西）



完掘状況全景（北東→南西）



完掘状況全景（南西→北東）



調査区全景（東→西）



調査区全景（東→西）



調査前現況 (南西→北東)



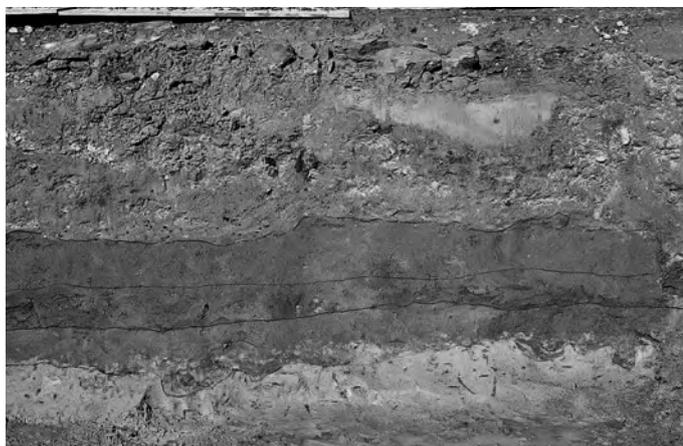
基本層序 AA' (北西→南東)



基本層序 BB' (南東→北西)



基本層序 CC' 南側 (南東→北西)



基本層序 CC' 北側 (南東→北西)



基本層序 DD' (南東→北西)



基本層序 EE' (南東→北西)



基本層序 FF' (南東→北西)



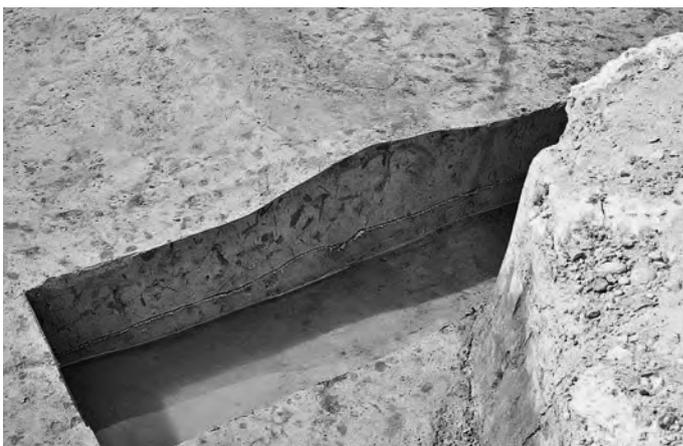
SX1 土層断面(南西→北東)



SX1 完掘状況(北西→南東)



哇畔 5 土層断面(北東→南西)



哇畔 6 土層断面(北東→南西)



哇畔 7 土層断面(北東→南西)



哇畔 8 土層断面(北東→南西)



哇畔 5 完掘状況(北東→南西)



哇畔 7 完掘状況(北東→南西)

試掘調査出土遺物 (試掘1~4)



試掘1
17-4T



試掘2
17-5T



試掘3
17-10T



試掘4
17-14T

本発掘調査出土遺物 (1~13・15~17)



1
24H10
(IIb層)



2
25H21
(IIb層)



3
25I11
(IIb層)



4
25H3
(IIb層)



6
24H4
(IIb層)



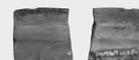
5
25H21, 25I16
(IIb層)



7
25H3
(IIb層)



8
23I11
(IIb層)



9
23I17
(IIb層)



10
23I6
(IIa層)



11
25H23, 26H6
(IIb層)



12
25H3
(IIb層)



13
23H25, 24H4
(IIa層)

金属製品 (14)



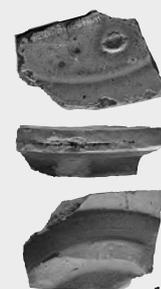
14
23H20
(IIa層)



15
23I16
(IIa層)



16
24I1
(IIa層)



17
25G25
(IIb層)

報告書抄録

ふりがな	かわねやちいせき だいろくじちようさ							
書名	川根谷内遺跡 第6次調査							
副書名	主要地方道新潟中央環状線道路整備事業に伴う川根谷内遺跡第2次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	新潟市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	牧野耕作(文化財センター)、脇本博康(株式会社吉田建設)、森 将志(株式会社パレオ・ラボ)							
編集機関	新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター							
所在地	〒950-1122 新潟市西区木場2748番地1 TEL.025-378-0480							
発行機関	新潟市教育委員会							
発行年月日	西暦2019年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かわねやち 川根谷内遺跡	にいがたけんいながたしこうなんく 新潟県新潟市江南区 あけほのちよう 曙町5丁目37-2 ほか	15104	365	37° 51' 32"	139° 07' 49"	20180801～ 20181015	821.6㎡	道路新設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
川根谷内遺跡	遺物包含地	古代(9世紀～10世紀)・ 近世		畦畔・水田跡・ 性格不明遺構		古代：土師器・須恵器 近世：近世陶磁器、金属製品		
要約	<p>川根谷内遺跡は、阿賀野川左岸の沖積地上にある旧自然堤防上の微高地に立地する。近世以降の開発による攪乱や昭和20年代の耕地整理による削平が調査区全体で認められ、遺存状況は良くない。調査の結果、古代(9世紀)の遺物・近世以降の遺構が検出された。近世以降の遺構は、畦畔・水田跡などの耕作関係遺構、旧河道の落ち際の可能性のある性格不明遺構が検出された。自然科学分析ではイネのプラント・オパールが確認されており、近世には水田が営まれていたことは確実である。また、明治24～5年作成の土地更正図によれば調査地の北側は旧河川を開拓した水田、南側は畑であった。これらが昭和20年代の耕地整理で削平され、昭和40年代初頭までは水田として耕作されていた。</p> <p>これらの土地改変により、本来存在した古代の包含層・遺構が消滅したと考えられる。周辺地形および出土遺物量から考えると、遺跡主体部はより安定した地形の自然堤防西側、遺跡範囲中心付近と推測できる。</p>							

川根谷内遺跡 第6次調査

－ 主要地方道新潟中央環状線道路整備事業に伴う川根谷内遺跡第2次発掘調査報告書 －

2019年3月25日印刷
2019年3月28日発行

編集 新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター
〒950-1122 新潟市西区木場2748番地1
TEL 025(378)0480

発行 新潟市教育委員会
〒951-8550 新潟市中央区学校町通一番町602番地1
TEL 025(228)1000

印刷・製本 株式会社ハイグラフィック
〒950-2022 新潟市西区小針1丁目11番8号
TEL 025(233)0321